

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第71集

KABUTUPPARA SITE

# 甲ッ原遺跡概報 I

(第1次調査～第3次調査)

1992. 3

山梨県教育委員会  
山梨県土木部

KABUTUPPARA SITE

# 甲ッ原遺跡概報 I

(第1次調査～第3次調査)

1992. 3

山梨県教育委員会

## 序

本調査概報は、県道須玉八ヶ岳公園線建設工事に伴い1989年度から1991年度までに実施した甲ッ原遺跡の発掘調査の概要をまとめたものであります。

本遺跡の所在する山梨県北巨摩郡大泉村は、八ヶ岳南麓に位置し、縄文時代の遺跡の宝庫として県内でも知られているところでもあります。1971年から大泉村で埋蔵文化財包蔵地調査が行われ、1972年には遺物包蔵地と認められ、甲ッ原遺跡と名が記されて早くからその存在が知られております。3次にわたる発掘調査によって、集落のおおよその範囲、及び集落の構成がより明確となりました。県道建設工事はほぼ南北に建設され、これまでの調査の結果、縄文時代中期の集落の中央付近を通過することとなりました。

甲ッ原遺跡は、油川と甲川の両河川に挟まれた台地上に位置しており、縄文時代中期後半を中心とした大集落であります。土器では、県内でもあまり発見例のない井戸尻式土器から曽利式土器への移行期にあたる資料を得ることができました。遺構では、県内で初めての縄文時代中期の掘立柱建物跡が、現在確認された数では6棟発見されました。南北に走る道路の幅約10mの中での調査のため集落の全体像は不明ではありますが、この幅での調査の成果は絶大なものがありました。調査は、A区・B区・C区と3区画に分けて行い、特にA区とC区では環状にめぐると思われる集落構造が認められたことが特筆されます。A区では住居址が37軒、掘立柱建物跡が5棟、土壌総数約200基が確認されております。C区につきましては、住居址は8軒、掘立柱建物跡1棟、土壌は170基を数えておりますが、まだ継続中でありまして更に遺構の数は増加することが予想されます。

甲ッ原遺跡の調査は今後も継続いたしますが、本報告に先立ってここに同遺跡の発掘調査概報を出すことになりました。本概報が縄文時代研究の一助となれば幸甚です。

末筆ながら、種々ご指導・ご協力を賜った関係機関各位、並びに直接調査に当たられた方々に厚く御礼申し上げます。

1992年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

# 目 次

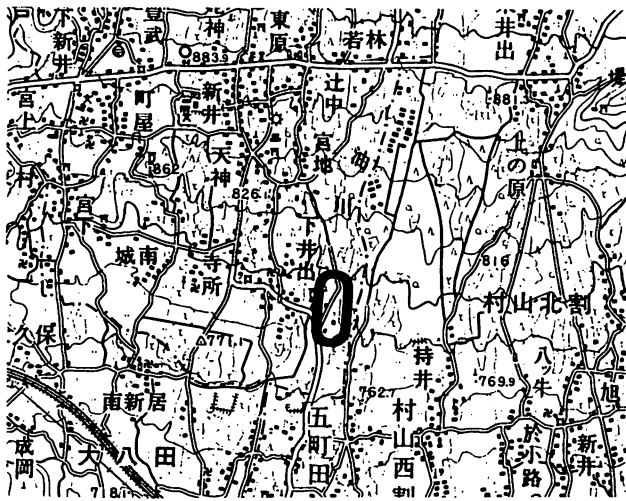
第1章 遺跡概況 .....	1
第2章 調査の成果 .....	3
第1節 A区の概要 .....	6
第2節 B区の概要 .....	20
第3節 C区の概要 .....	24
第3章 考 察 .....	28
第1節 甲ッ原遺跡の集落構造 .....	28
第2節 掘立柱建物跡 .....	30
第3節 甲ッ原遺跡の出土土器 .....	32
第4節 土壌について .....	34
写真図版 .....	35

# 例 言

1. 本書は、1989年度から1991年度までに、県道須玉八ヶ岳公園線建設事業に伴って発掘調査された山梨県北巨摩郡大泉村甲ッ原遺跡の発掘調査概報である。
2. 調査は、山梨県土木部から山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査、整理作業は山梨県埋蔵文化財センターが行い、1989年度は同機関の山本茂樹・森原明廣が担当し、1990年度・1991年度は同機関山本茂樹・今福利恵が担当した。
4. 発掘調査の期間は、1989年11月6日から12月12日迄、1990年5月14日から12月27日迄、1991年5月20日から12月26日迄の三ヶ年三次にわたって実施され、1992年度以降も継続中である。
5. 本書の作成は、山梨県埋蔵文化財センターの山本・今福が行い、文責はそれぞれ文末に記した。
6. 図版の縮尺は、住居址 1/60・掘立柱建物 1/100・土壌 1/20・土器実測図 1/6・土器拓本 1/3・石器 1/3を基本としているが、一部変更している箇所がある。
7. 写真撮影は、遺構を山本および今福が行い、遺物を今福が行った。
8. 本書にかかる出土品ならびに記録図面、写真などは、一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
9. 発掘調査および本書の作成に当たり、下記の方々にご教示・ご協力を得た。記して謝意を表する次第である。

小林達雄・武藤雄六・小林公明・伊藤公明・桜井真貴・杉本充・佐野隆・宮沢賢臣・大鷹依子・伊藤恒彦・岡田保彦・佐野勝広・山路恭之助・朴柄植・渋谷昌彦・賛田明・櫛原功一・岸崎浩実・下平博行

# 第 1 章 遺 跡 概 況



第 1 図 遺跡位置図

八ヶ岳の南麓、大泉村の南端に甲ッ原遺跡は位置する。地番は山梨県北巨摩郡大泉村西井出字大林、和田である（第 1 図）。八ヶ岳には広大な裾野が発達し、南麓のほぼ中央に大泉村は位置している。八ヶ岳の裾野は標高1000m付近に自然湧水帯を持つ。これらの湧水より流れ出す大小の河川によって開析された谷と細長い尾根が多くみられ、こういった尾根上に多くの遺跡が知られる。甲ッ原遺跡も八ヶ岳の形成する南に緩く

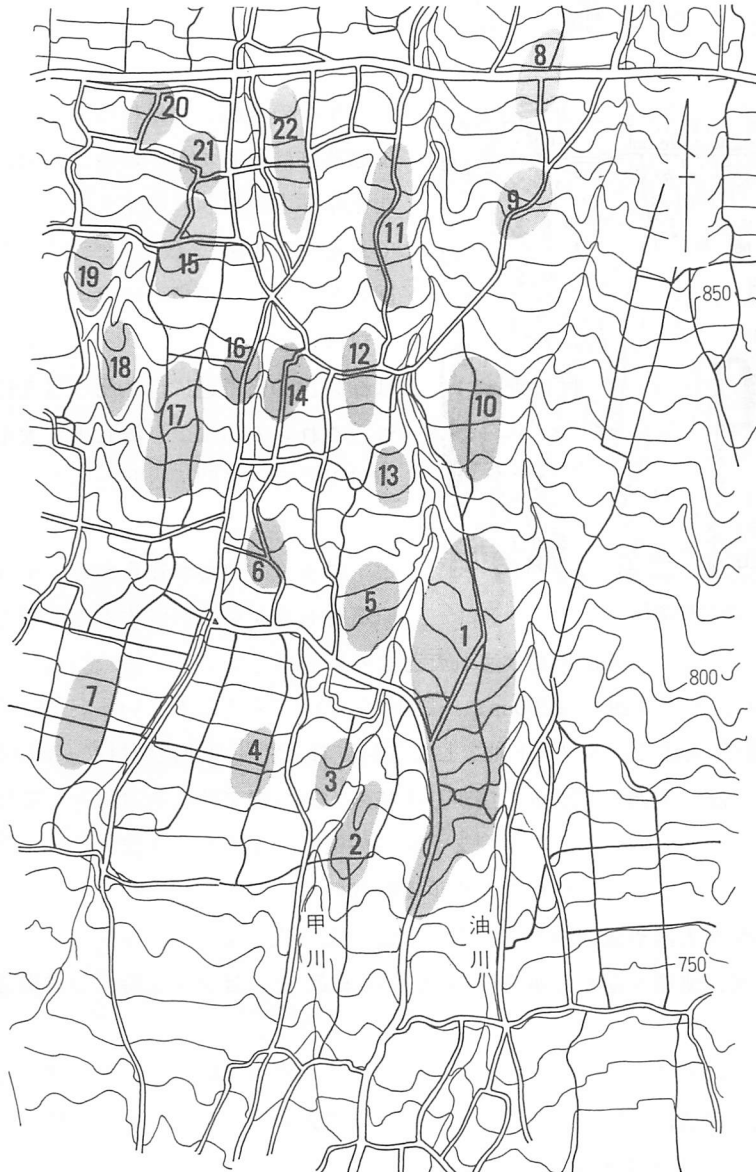
傾斜したやせ尾根上で、南流する甲川と油川に挟まれたところに立地している。緩く傾斜した遺跡のすぐ東側を油川が流れ、甲川は西へ約 200 m、一段下がったところを流れている。遺跡の標高は 800 m 前後である。近年周辺ではリゾート地として注目され、別荘の建設が目立っている。

従来甲ッ原遺跡は南北約 1 km、東西約 150 m の広がりを持つ大きな縄文時代の遺跡として知られている。遺跡からは縄文時代中期を中心に押型文土器や諸磯 b 式土器から加曾利 B 式土器までが連続して確認されているほか、弥生時代後期や平安時代の土器などが知られている。今回の調査では縄文時代の押型文土器や後期の土器、あるいは弥生時代の遺物などは検出されていないが、縄文時代前期初頭、諸磯 b 期から連続して曾利 V 期まで、そのほか平安時代の遺構遺物がみつかっている。

大泉村も含めて周辺の八ヶ岳南麓では、縄文時代と平安時代、中世の遺跡が突出して多く知られ、弥生時代、古墳時代の遺跡は極端に少なくなる。甲ッ原遺跡の周辺においても同様で、多くは縄文時代と平安時代、中世の遺跡が知られている（第 2 図）。

周辺の発掘調査では、甲ッ原遺跡の北西約 1 km の天神 C 遺跡で縄文時代前期の諸磯期の住居址 49 軒、土壌 400 基以上の環状集落が検出された。また西へ約 1 km の寺所遺跡では諸磯期の住居址 2 軒が調査されているほか平安時代の住居址が 31 軒みつかっている。さらに北西へ 500 ~ 600 m の宮地第 2、第 3 遺跡では縄文時代中期の住居址が調査されている。やや離れたところでは、西約 1 km に国史跡に指定された縄文時代後晩期の配石遺構を伴う金生遺跡があり、また南西約 2 km の中央道長坂インター周辺に柳坪遺跡が存在する。柳坪遺跡では、曾利期の集落が調査されたほか、弥生時代の住居址がみつかり、この周辺では最高地の弥生時代遺跡である。そのほか、曾利期では姥神遺跡や方城第 1 遺跡などの環状集落が調査されている。

こういった遺跡のほか、甲ッ原遺跡の周辺には存在が知られているものも多い。縄文時代前期前半の遺跡は山梨県内でも少なく、周辺では金生遺跡で調査されているのみである。諸磯期



- 1 甲ッ原
- 2 和田第2
- 3 甲ッ
- 4 原田
- 5 下井出
- 6 清水
- 7 寺所
- 8 古林第1
- 9 古林第2
- 10 古林第3
- 11 宮地第1
- 12 宮地第2
- 13 宮地第3
- 14 宮地第4
- 15 天神C
- 16 天神A, B
- 17 山崎第1
- 18 山崎第2
- 19 城上第1
- 20 城上第2
- 21 新井
- 22 辻

第 2 図 甲ッ原遺跡と周辺の遺跡

では近接したところで、和田第2遺跡、原田遺跡、下井出遺跡、古林第3遺跡があり、いずれも200m～300m離れているのみで、関係が注目される。曽利期になると遺跡も増え、周囲のほとんどの遺跡で該期の遺物がみられるようになる。前述の宮地第2遺跡では曽利I期の単期集落跡で、このほか、甲ッ遺跡、宮地第3遺跡、古林第3遺跡、清水遺跡でも曽利期の土器が確認されており当時の社会組織を考える上で興味深い遺跡である。

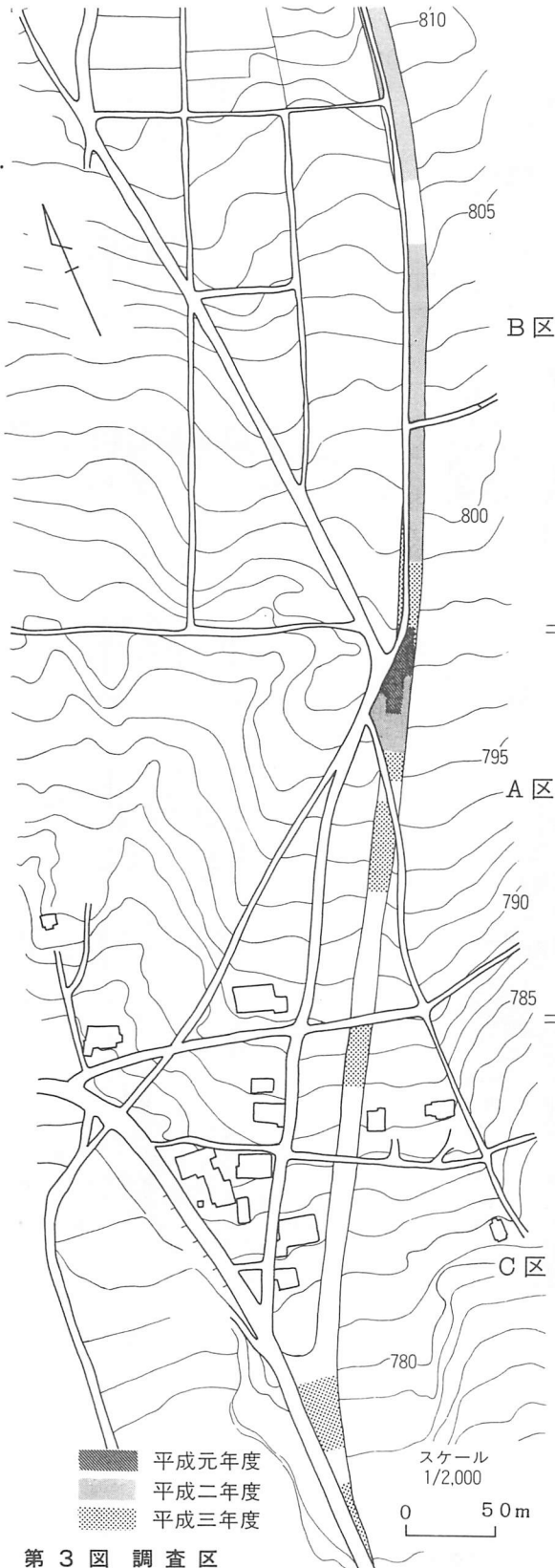
さらに甲ッ原遺跡の今回報告する場所の南端部に相当する部分で、その東側に隣接する1800㎡程の場所を大泉村教育委員会が調査し、諸磯b、c期の住居址2軒と土壇約100基、平安時代の住居址1軒がみついている。中でも諸磯c期の住居址は径8mを越える大形住居址で、該期のものとしては異例で注目される。(今福)

## 第2章 調査の成果

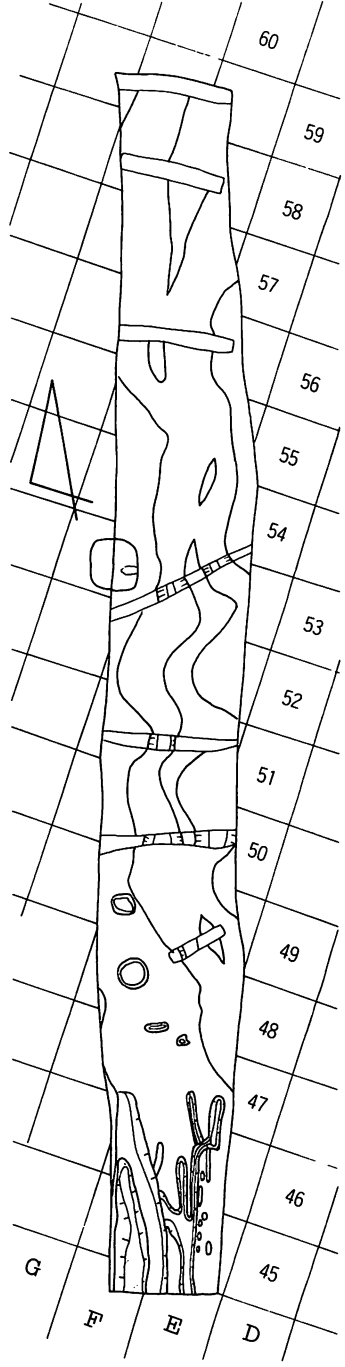
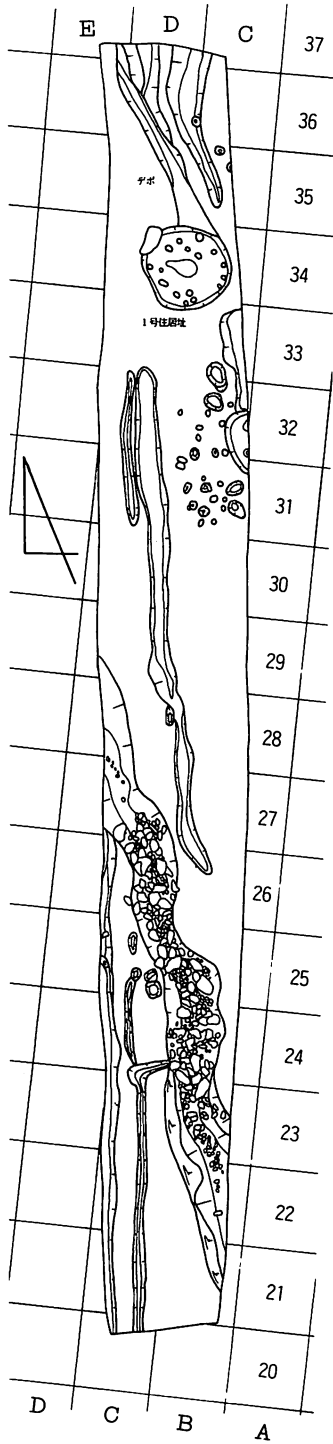
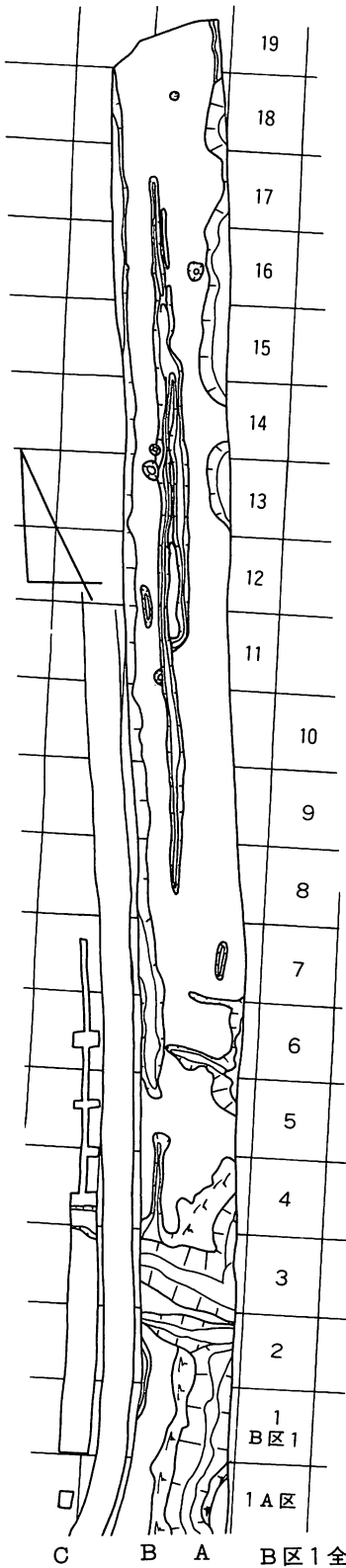
発掘調査は、県道須玉八ヶ岳公園線建設にともない、1989年度より実施され、1992年度以降も継続されている(第3図)。遺跡の調査対象となる区域は幅約11m、長さ約800mに及び、その面積は約9,000㎡で、1991年度までに約4,700㎡が終了している。調査は用地買収、工事と平行して行われているため、調査区域が連続していない部分がある。このため遺跡の全容は未だ明確でない部分が多いが、1991年度までの調査の結果、複数の環状集落が連続している様相を呈しているものと考えられる。詳細は今後の調査によって明らかにされてこよう。

調査区域は南北に長いため、便宜的に北からB区、A区、C区の3区に分けた。グリッドは5m×5mを基本とし、南北方向においてA区、B区で磁北より28°、C区で30°東にふった。番号は南北方向に数字を、東西方向にアルファベットを設定した。

調査の結果よりA区からC区にかけて最も遺構が集中し、現在までに縄文時代前期から中期にかけての住居址が45軒、掘立柱建物跡が6棟ほど、土壌は300基以上みつまっている。遺物からは前期諸磯b期から曾利V期まで連続しているが、諸磯b期と井戸尻期から曾利期にかけてまとまった集落となり、他の時期は散漫としている。B区はA区の北側にあたり、遺物遺構は極端に希薄となるが、A区から約170mほど北で、中期中葉の住居址が5軒ほどの集落となる。また平安時代の住居址が2軒みつまっている他、旧河川が検出された。(今福)



第3図 調査区



B区3 全体图

0 5m

第 4 图 B区全体图





第 5 图 A·C区全体图

## 第 1 節 A 区の概要

A 区では、1991年度まで約 1,500 m<sup>2</sup>を調査した(第 5 図)。用地買収の関係で南北 2 箇所に分かれる。直径約 150 m ほどの環状集落の一部がかかり、住居址 37 軒、土壇 200 基以上、掘立柱建物跡 5 棟、屋外埋甕 2 基が検出された。住居址は、前期初頭 1 軒、諸磯 b 期 6 軒、五領ヶ台期 1 軒、井戸尻期 4 軒、曾利期 19 軒、時期不明 6 軒である。掘立柱建物跡は 5 棟確認できた。少なくとも 2 回の建て替えがみられ、曾利Ⅳ期の住居址を切っていることから、曾利Ⅳ～Ⅴ期にかけてのものと思われる。屋外埋甕はいずれも曾利Ⅰ期である。

遺構の配置は集落が弧状に切り合いながら並び、この中心に向かって土壇が多くみられる。住居址と土壇は一部重複するが、この境に掘立柱建物跡が住居址の弧状の配置と同じ方向に主軸をもって並ぶ。

前期初頭の住居址、および五領ヶ台期の住居址は単独で、該期の他の遺構はみられない。諸磯 b 期の住居址は切り合い関係がみられ、土壇も多くみられる。集落が継続的にみられるのは井戸尻期の段階からで曾利Ⅴ段階までほとんどの住居址が切り合い関係を持ちながら検出された。

住居址は多角形のもの若干みられるが、前期初頭の方形の住居址を除いて、ほとんど径 6 m 前後でおおよそ円形を呈する。曾利期の住居址の炉はほとんど石囲炉でその南側に地床炉を持つものが目立つ。また曾利Ⅲ期において径 9 m を越える大形住居址が 1 軒検出された。住居址は諸磯 b 期でまとまってみられるほか、井戸尻期から多くなり曾利Ⅲ期でピークとなり、以後減少していく傾向にある。掘立柱建物跡は、2 本×4 本で、幅約 3 m、長さ約 10 m を測るが、大方調査区外に延びているため不明なものが多い。

調査区の北側で、住居址がみられなくなるあたりから極端に遺物、遺構が希薄となり、環状集落の北限となる。南限は未調査のため確認できてはいない。(今福)

### 10号住居址(第 6、7、8 図)

本住居址は、A-9・10グリッドに位置している。

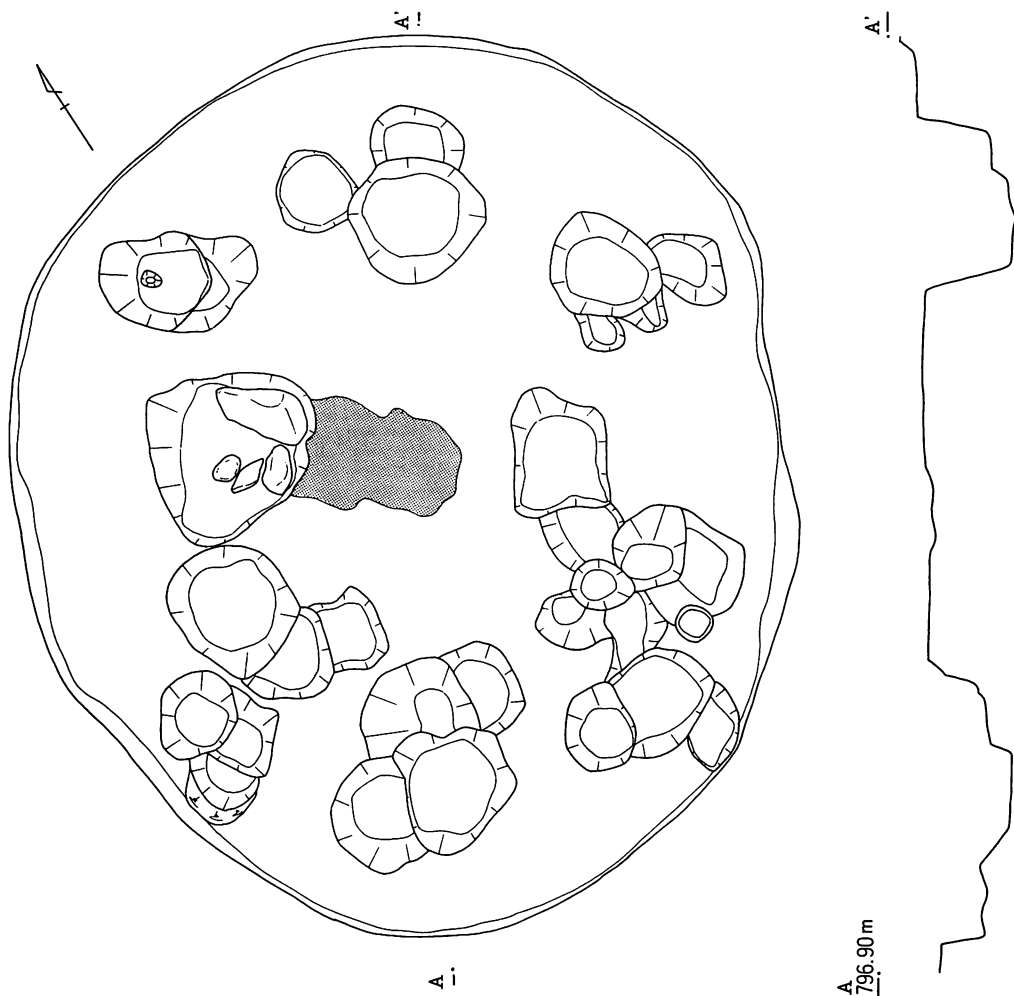
形態はほぼ円形を呈し、規模は、炉を中心として北東から南西に長軸をもち、長軸 7.06 m、短軸 6.20 m を計測する。

壁溝はなく、確認面から床までの壁の高さは 3 cm から 10 cm を測り、全体的に浅い。

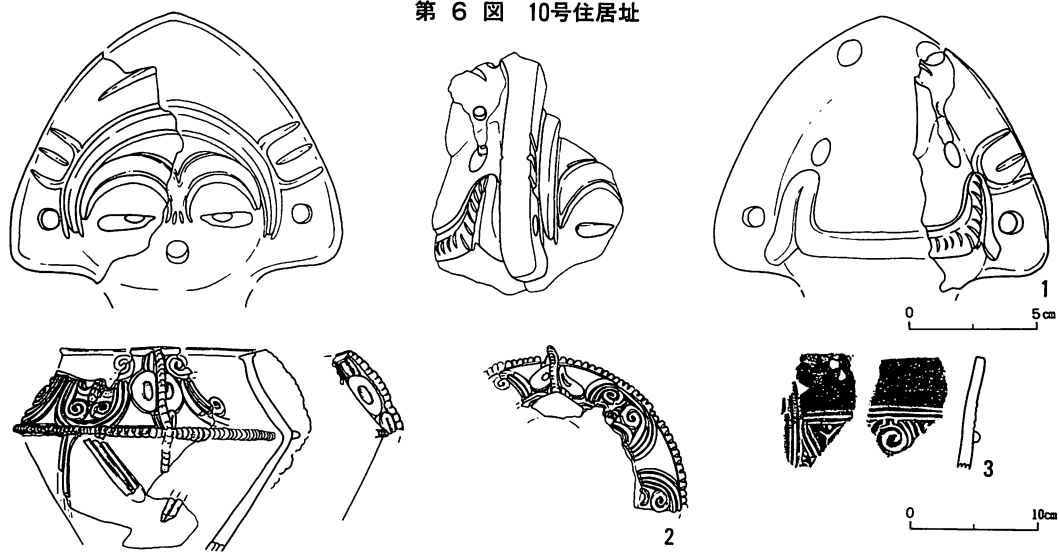
炉は、住居址のほぼ中央に位置し、長軸は土壇に切られているため計測できない。短軸は約 75 cm である。

炉の形態については、土壇等の切り合い関係によってその形態は明らかではない。床面は軟弱であり凹凸が認められ、1・2号掘立柱建物跡に切られる。(山本)

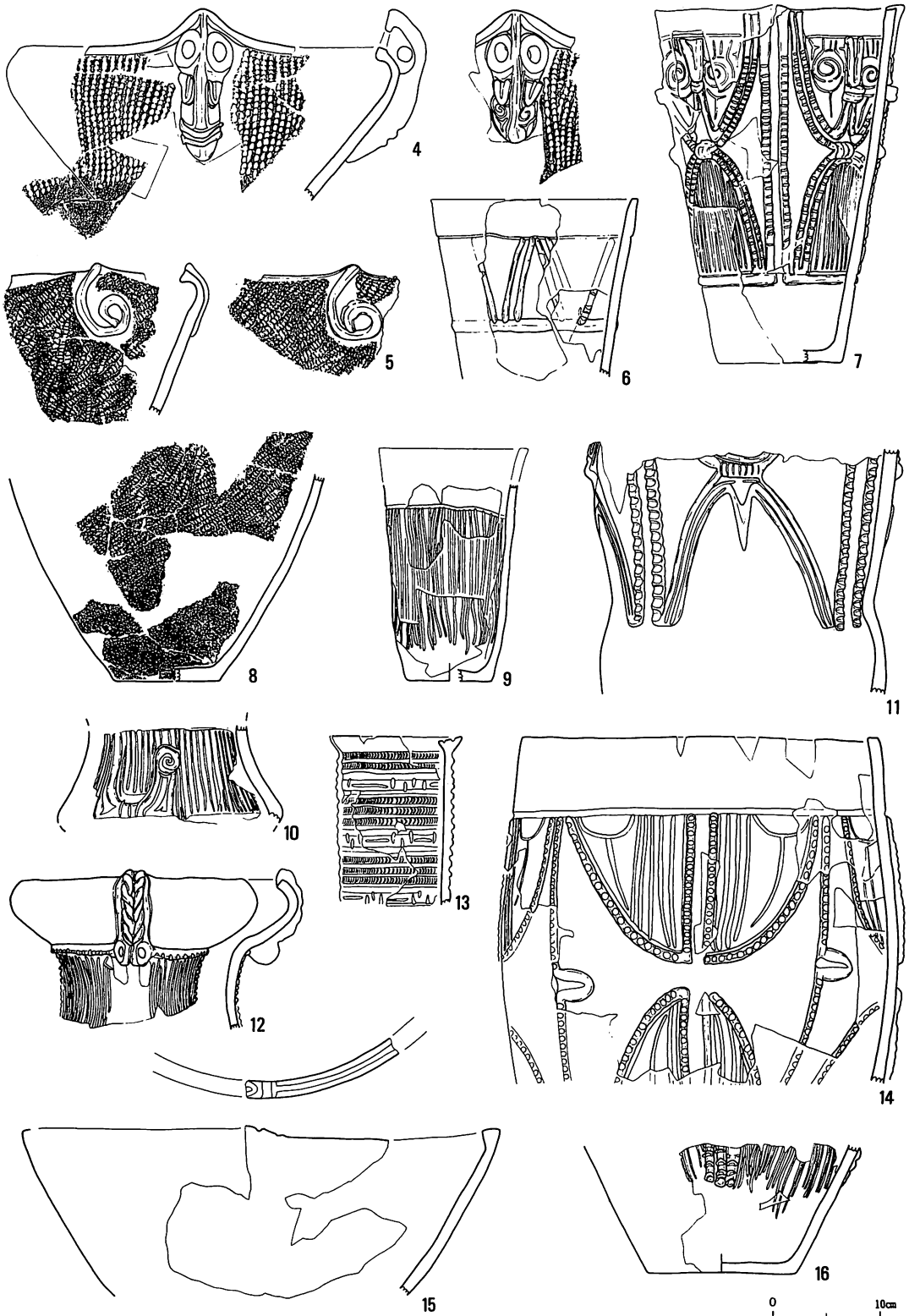
遺物 ほとんどが覆土中より出土したもので、井戸尻式土器と曾利Ⅰ式土器が混在している。1 は、土偶の頭部で、半分以上欠損する。全体は推定で 30 cm を超えるものと思われ、かなりの大形である。頭部は三角形に近く、中空につくられている。後頭部と右後頭部、耳の部分に貫通孔がみられる。山梨県一の沢西遺跡に同様の類例がみられるが、顔面把手の可能性もある。



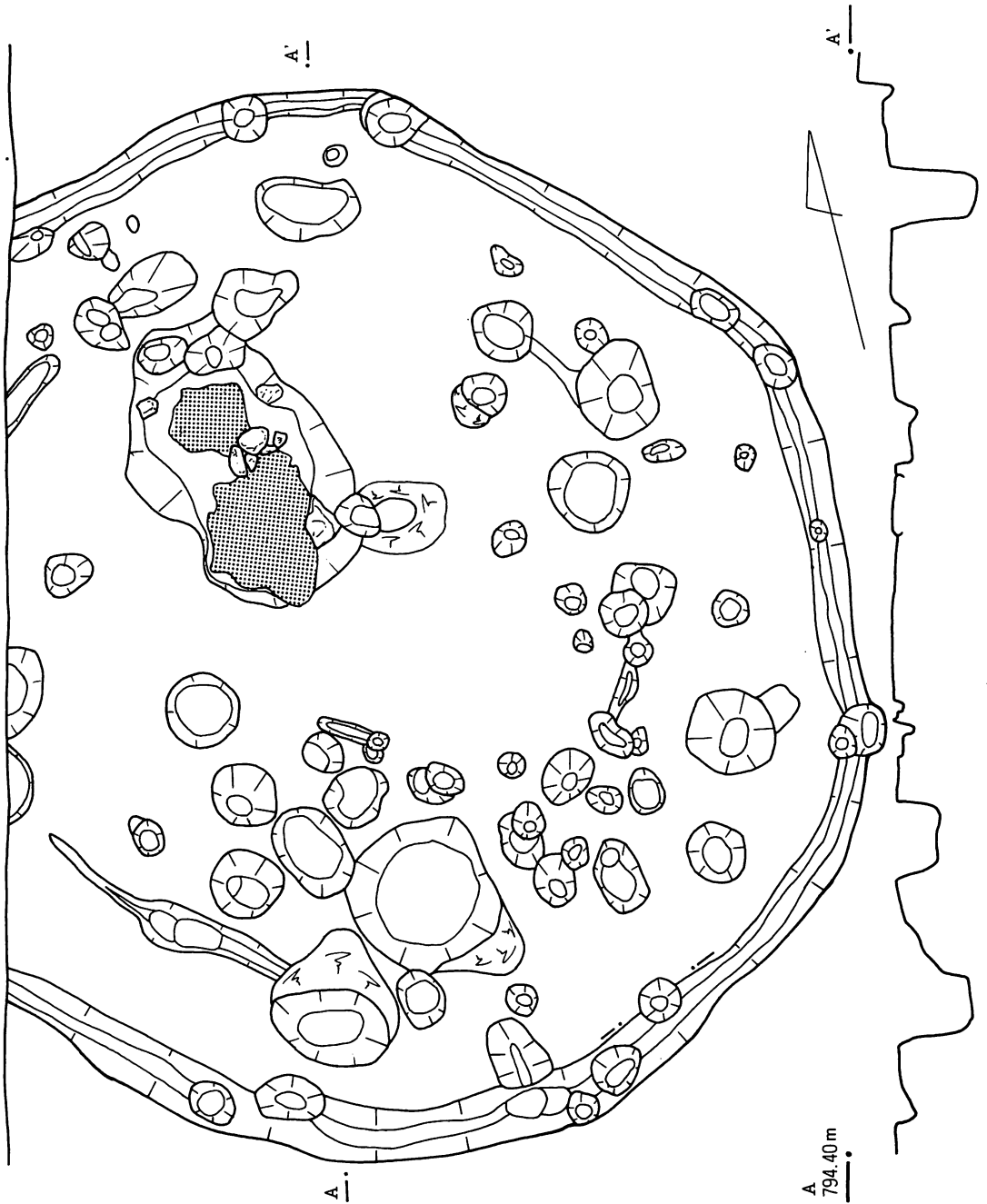
A:  
第 6 图 10号住居址



第 7 图 10号住居址出土土器 (1)

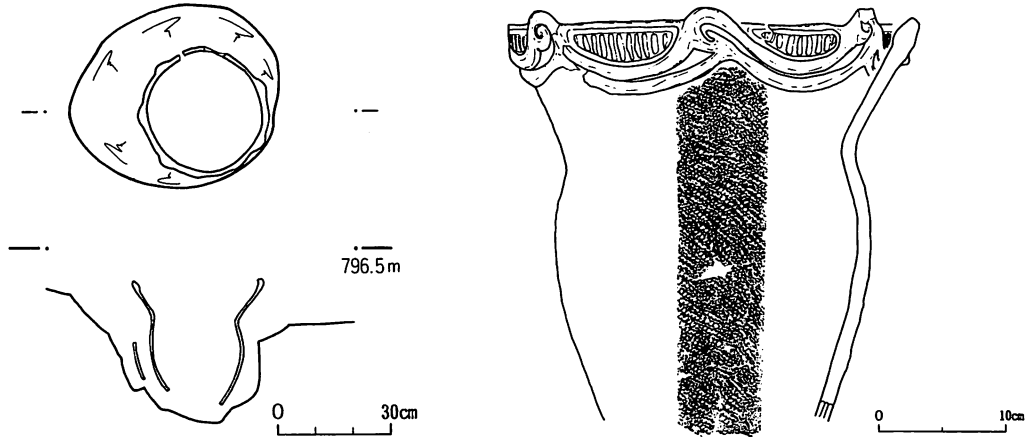


第 8 图 10号住居址出土土器 (2)



第 9 図 33号住居址

井戸尻式土器は2～8にみられるように屈折する器形のものや渦巻、三叉文などを組み合わせたもの、動物意匠を持つものなどがみられる。4の口縁部には丸みを帯びた三角形の連続押圧文が縦位に充填される。2の土器の口縁部の文様はU字形の隆帯と渦巻を組み合わせたもので、7の胴部上半のモチーフに類似する。7はU字形のモチーフを組み合わせた文様で、11、14の曾利式土器に連続していくものである。上半部は渦巻と三叉文によって表現され、下半部は籠状工



第 10 図 33号住居址埋壘

具による沈線で充填される。下端は横位の隆線で区画され、いまだ井戸尻式土器の色彩が強い。11の土器のU字形モチーフは幅広の隆帯の上に沈線を二本ひいて三本のようにみせている。14はU字形のモチーフが中央で縦の隆線とつながり、内部に三叉文がみられ、古い様相を示している。16も同じ系統の土器であろう。曾利式土器は条線が目立ち、9、12、14の条線は篋状工具によるものである。10は屈折底となるもので、幅広の隆帯による懸垂文と半截竹管状工具による条線がみられる。16の土器も半截竹管状工具によるものである。11は横位に半截竹管状工具の背面を使って沈線をめぐらせ、連続爪形文と交互刺突文によって文様が構成されている。いずれも井戸尻式終末から曾利Ⅰ式の古い段階に比定される。(今福)

### 33号住居址(第9、10図)

本住居址は、B・C-21・22グリッドに位置している。

形態は、西側の一部が調査区外に広がっているため形は明確ではなく、7角形ないし8角形を呈するものと思われる。規模は、炉を中心としてほぼ南北に主軸を有し9.10mを計測する。壁溝は全周し、深さは10cmから12cmであり、幅は20cmから40cmを測る。確認面から床までの高さはほぼ30cmで、残存状態のよい住居址である。炉は2度にわたって構築され、炉石は抜き取られており、炉の長軸の南端には埋壘が存在している。床面は全体によく踏み締められる。柱穴は本住居址の内側にもう1本の溝及び柱穴が確認され、それぞれの壁のコーナーに設けられている。また、古い柱穴の埋め戻しが新旧の住居址で認められることから、33号住居址は建て替えと拡張の繰り返しを行い、旧炉のすぐ脇に新しい炉を形成している。(山本)

**埋壘** 住居址の南側の周溝にかかる部分より検出され、住居址の入口部分に埋設されたものである。掘り方は住居の周溝に半分ほどかかり、土器は正位に埋設されていた。土器の底部は粘土帯で欠損し、口縁部も一部欠損している。土器の口縁部には連続する渦巻文が7単位で配され、二本一組の隆線で表現している。また渦巻の間は、棒状工具によって縦位の沈線で充填され、半円形に区画される。胴部はLRの単節縄文で縦位に回転施文している。外面の下半部は二次焼成を受け、また上半部から口縁部にかけて煤が付着し、煮炊きに使用された痕跡が明瞭に残る。重量4.66kg。曾利Ⅲ式土器に比定される。(今福)

### 34号住居址（第11、12図）

本住居址は、B-23グリッドに位置しており、33号住居址と切り合い関係にある。

形態は、長方形を呈しほぼ東西方向に長軸を有する。規模は、炉を中心として長軸4.52m、短軸3.94mを計測する。

確認面から床面までの高さは12cmから15cmを有し、壁溝は認められない。

炉は、住居址の中央からやや西方向に不整形につくられた地床炉で、焼土は部分的に残存している。床面は、全体的に軟弱であり、炉から東側はやや高くなる。

（山本）

遺物 前期初頭に位置付けられる一群で、東海系の薄手土器（第

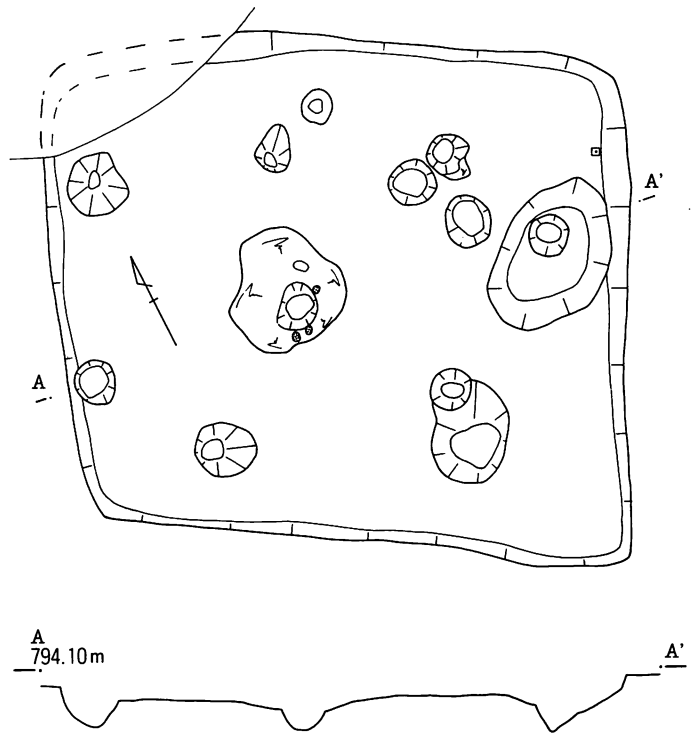
12図1～15）と、繊維を多く含む縄文の施文された土器（同図16～30）が混在している。

薄手土器は、口縁部と胴部の間に段をつくり、刻みを施している。この刻みは篋状工具（1、2）や多截竹管状工具による連続押圧によるもの（3～6）や指によってつまみだしているもの（7）がみられる。また口唇部に篋状工具によって刻みが施されるもの（1、2）もある。口縁帯には半截竹管状工具によって縦位、斜位あるいは矢羽状の細線が施される。胴部も同様に斜位、斜格子、矢羽状の細線がみられる。この細線は全体的に乱れて雑な感を受け、またひじょうに浅く施されている。器壁は3～4mmほどで、全体に指頭圧痕が顕著である。

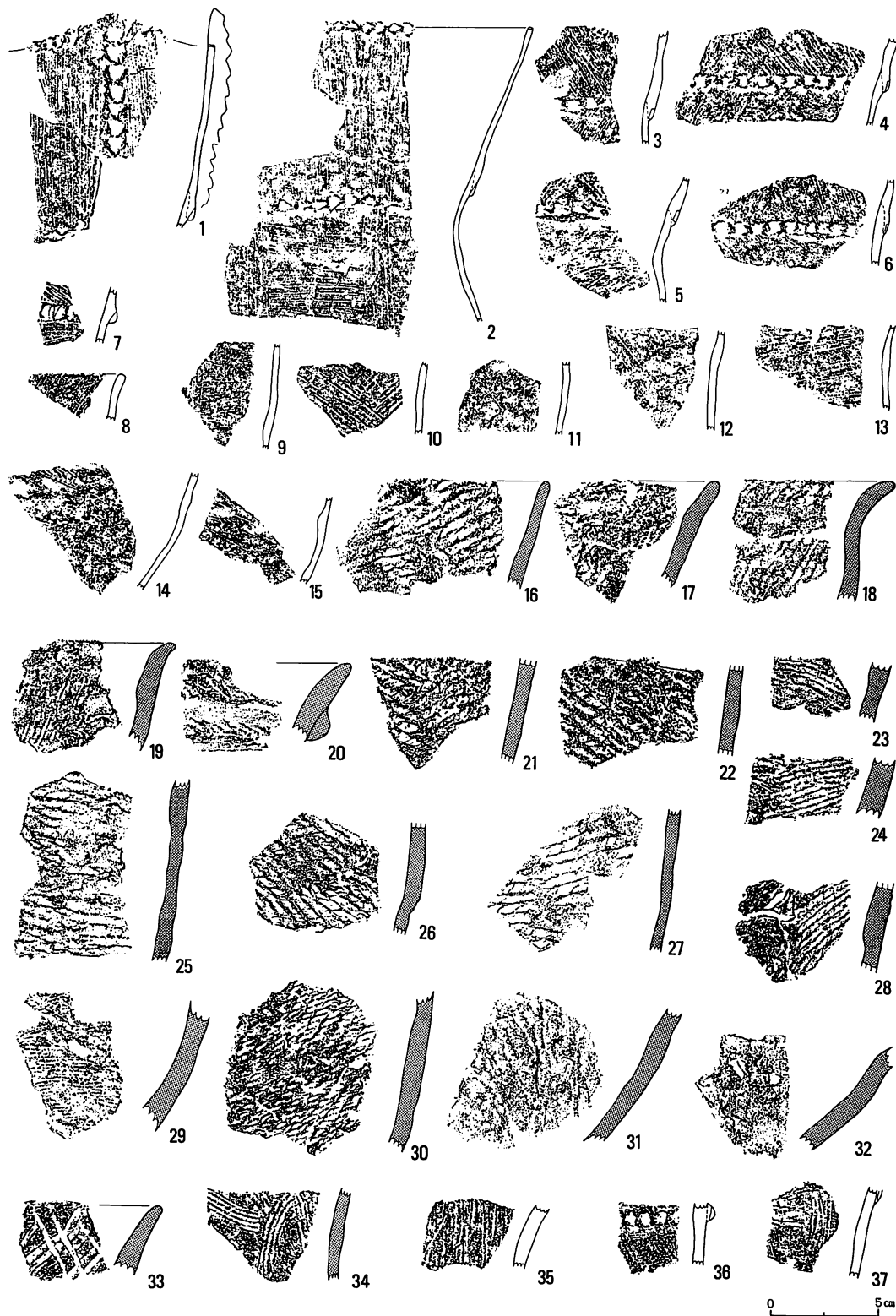
繊維を含む土器は、多く無節の斜縄文が目立つ。無節の斜縄文は条の幅約4mmほどのもの（16～26）が多く、中には幅約1mmほどのもの（29）もある。回転方向は横位である。また少数ながら二段の縄（30）や結節縄文（28）などが存在する。その他篋状工具による斜格子の条線が施されるもの（33）や貝殻条痕によるもの（34）がみられる。器形において、口縁部が直立するものと外反するものがみられる他、口縁部直下に隆線が巡るものがある。底部は明確でないが丸底あるいは丸底に近いかたちになると思われる。内面調整は雑で指頭圧痕が残ることがある。

これらの他、僅かではあるが、東海系の薄手土器に類似するものがみられる（35～37）。薄手土器に比べやや厚いが、半截竹管状工具による細線が施されている。

木島式土器のⅧ段階あるいは清水ノ上Ⅰ式に相当する時期である。（今福）



第11図 34号住居址



第 12 图 34号住居址出土遗物



## 7号土壙(第13、14図)

諸磯b期の住居址に掘り込まれており、土層の観察によっても明確なプランの検出は困難であったが、住居址の床面を掘り込んでおり、ここで長径100cm、短径95cm、確認面からの深さ50cmほどの円形を呈する。土器が二個体完形で出土し、それぞれ曾利式土器と井戸尻式土器で時期が異なるものである。曾利式土器は横におかれた状態で、正位におかれた井戸尻式土器と底部で接し、押されたように割れていた。このため両者は共存していると判断した。また井戸尻式土器は曾利式土器と接する部分で外圧によって1/3ほどが内部に押し込まれるよう割れていた。それぞれ土器の内部の土は周囲の土と同じで、流れ込んだものである。(今福)

**遺物** 曾利式土器は中空の四単位の大把手を持つもので、内一つが突出して大きくイノシシと思われるモチーフがのる。これらの把手は井戸尻期にみられるもので、曾利期にはみられないものである。胴部は横位に粘土紐を波状に貼付したものがみられ、その下にU字形の懸垂文が二単位に配される。このモチーフの間は半截竹管状工具による縦位の沈線で充填される。完形で、重量6.54kg、曾利I式の新段階である。

井戸尻式土器は胴部上半を欠損する。文様は二本の縦位の隆線によって四単位に区画される。また幅広の隆帯によって上下二段に区画され、文様モチーフは上下で鏡像反転となる。井戸尻式土器の終末期に比定される。重量約8kg。(今福)

## 156土壙(第16図)

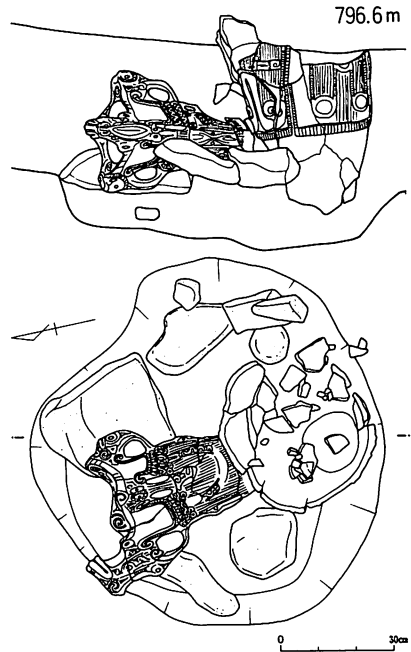
形態は不整円形を呈する。規模は66×55cm、深さは40cm、床面は凹凸が見られ中央が窪む。立ち上がりは垂直に近い。遺物は土器(胴下半部・底部一部欠損し、出土状態は、土壙中央部へ倒れ込んだような状況が見られ、口縁部は床面から14cmほど浮いた状態である)。位置はB-25グリッドで28号住居址と切り合い関係にある。(山本)

## 164土壙(第15図)

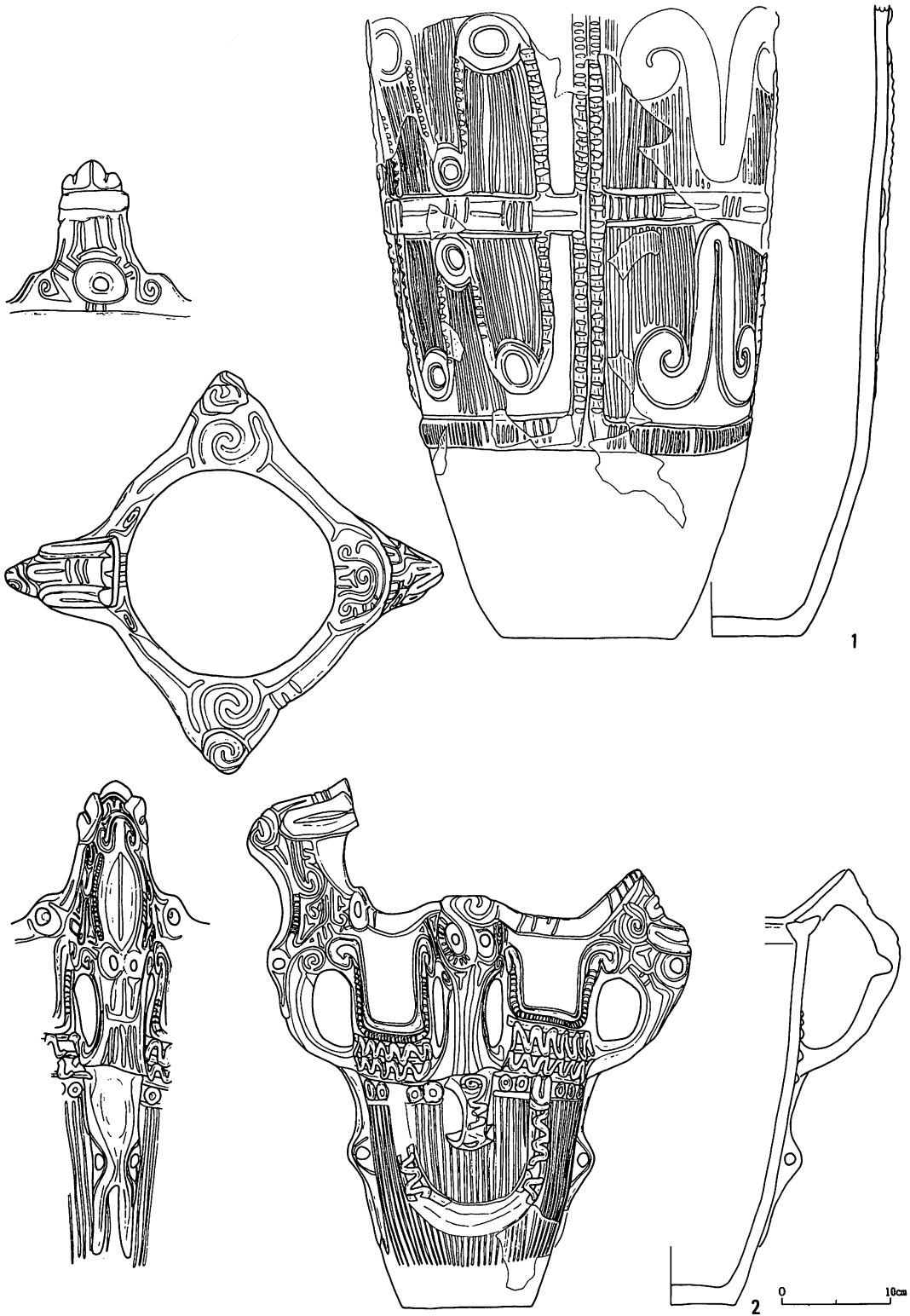
形態は不整円形(一部調査区外)を呈する。規模は約85cm、深さは31cm、床面は平坦である。立ち上がりは比較的緩やかである。遺物は石皿片(底面よりやや浮いた所で検出される)・石・土器片である。覆土は、上面から下面まで全体的に炭化物が散乱している。位置は、C-25グリッドで36号住居址と切り合い関係にある。(山本)

## 212土壙(第15図)

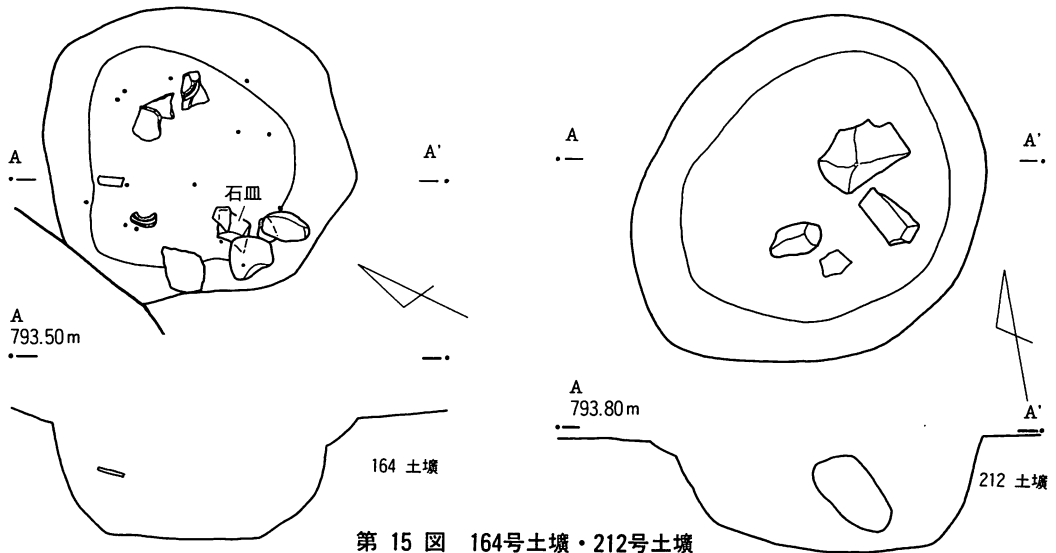
形態は楕円形を呈する。規模は103cm×84cm、深さは30cm、底面は皿状を呈する。立ち上がり西側はなだらかで東側は垂直に近い。遺物は石(3ヶ確認され、覆土中位に存在している)・土器片。位置はA-23グリッドで、土壙は南側で希薄となる。(山本)



第13図 7号土壙



第 14 图 7号土壤出土遗物

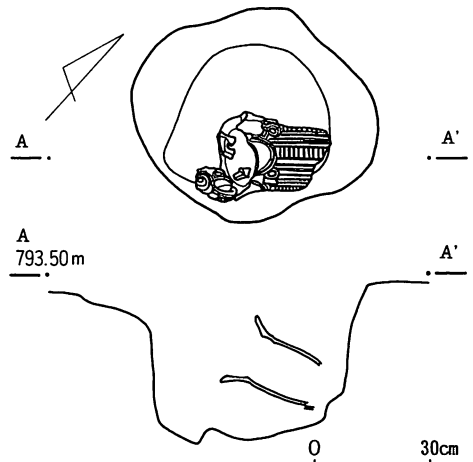


第 15 図 164号土壌・212号土壌

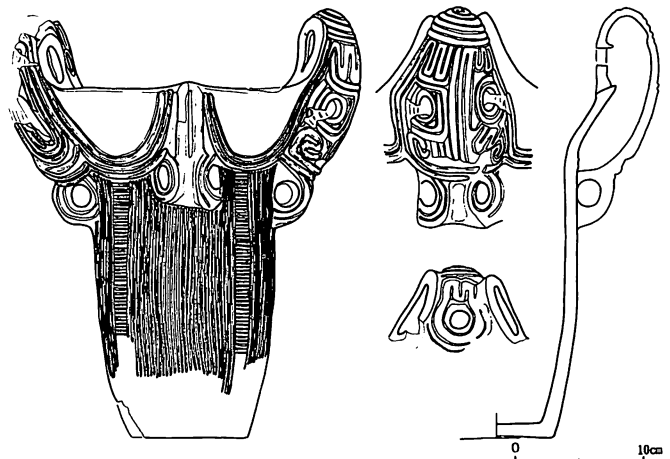
156号土壌遺物 (第17図)

水煙形土器と呼ばれるもので、把手の一部と底部を約半分ほど欠損するが、ほぼ完形である。口縁部には中空のドーム型把手を二つ相對する位置に持つ。この把手の一つは欠損しているがそれぞれモチーフが異なり、半截竹管状工具による平行沈線と隆線によって表現される。頸部には眼鏡状の把手が四単位みられ、内二つは中空把手に連続し、他は口縁部に向かって橋状把手となる。これらの把手は隆線によるU字形のモチーフで連結される。胴部は半截竹管状工具によって縦位の集合沈線が施されるが、中空把手の下と把手間においては横位に施されている。

この手法は長野県南部に分布する唐草文土器に多くみられる文様である。外面は暗褐色を呈するが、胴部下半以下は淡赤褐色となり、また内面底部付近にはお焦げが付着し、煮炊きに使用されていたことがわかる。重量2.15kg。曾利I式の古い段階に位置付けられる。(今福)



第 16 図 156号土壌



第 17 図 156号土壌出土土器

## 掘立柱建物跡（第18、19図）

掘立柱建物跡は、環状を呈する住居址群の内側に建てられており、住居址の形成される方向に長軸を有する。

### 1号掘立柱建物跡

東西に長軸をもち4×2本の柱穴で構成され、北側で10.10 m、南側で9.92 mを計測する。短軸は2本の柱穴で構成され、東側で2.90 m、西側で2.70 mである。炉及び床面は、確認されない。面積は、28.0 m<sup>2</sup>である。

### 2号掘立柱建物跡

東西に長軸をもち、2×2本の柱穴が確認され、北側で2.96 m、南側で3.00 mを計測する。短軸は、東側で2.60 m、西側で2.44 mである。炉及び床面は確認されない。本建物跡は、10号住居址を切って建てられている。面積は、7.50 m<sup>2</sup>である。

### 3号掘立柱建物跡

東西に長軸をもち4×2本の柱穴で構成され、長軸は北側で7.26 m、南側では調査区外に延びているため不明である。短軸は、西側で2.08 mである。炉及び床面は、確認されない。面積は、15.1 m<sup>2</sup>である。

### 4号掘立柱建物跡

東西に長軸をもち、3×2本の柱穴が確認され、長軸は北側で6.90 m、南側で7.10 mを計測する。短軸は、東側で2.66 m、西側で2.22 mである。炉及び床面は、確認されない。本建物跡は、10号住居址を切って建てられている。面積は、17.1 m<sup>2</sup>である。

### 5号掘立柱建物跡

ほぼ南北に長軸をもち、4×2本の柱穴が確認され、長軸は西側で12.10 mを計測する。短軸は、北側で2.64 mである。東側の長軸及び南側の短軸は、一部調査区外に延びているため不明である。炉及び床面は、確認されない。面積は、31.9 m<sup>2</sup>である。

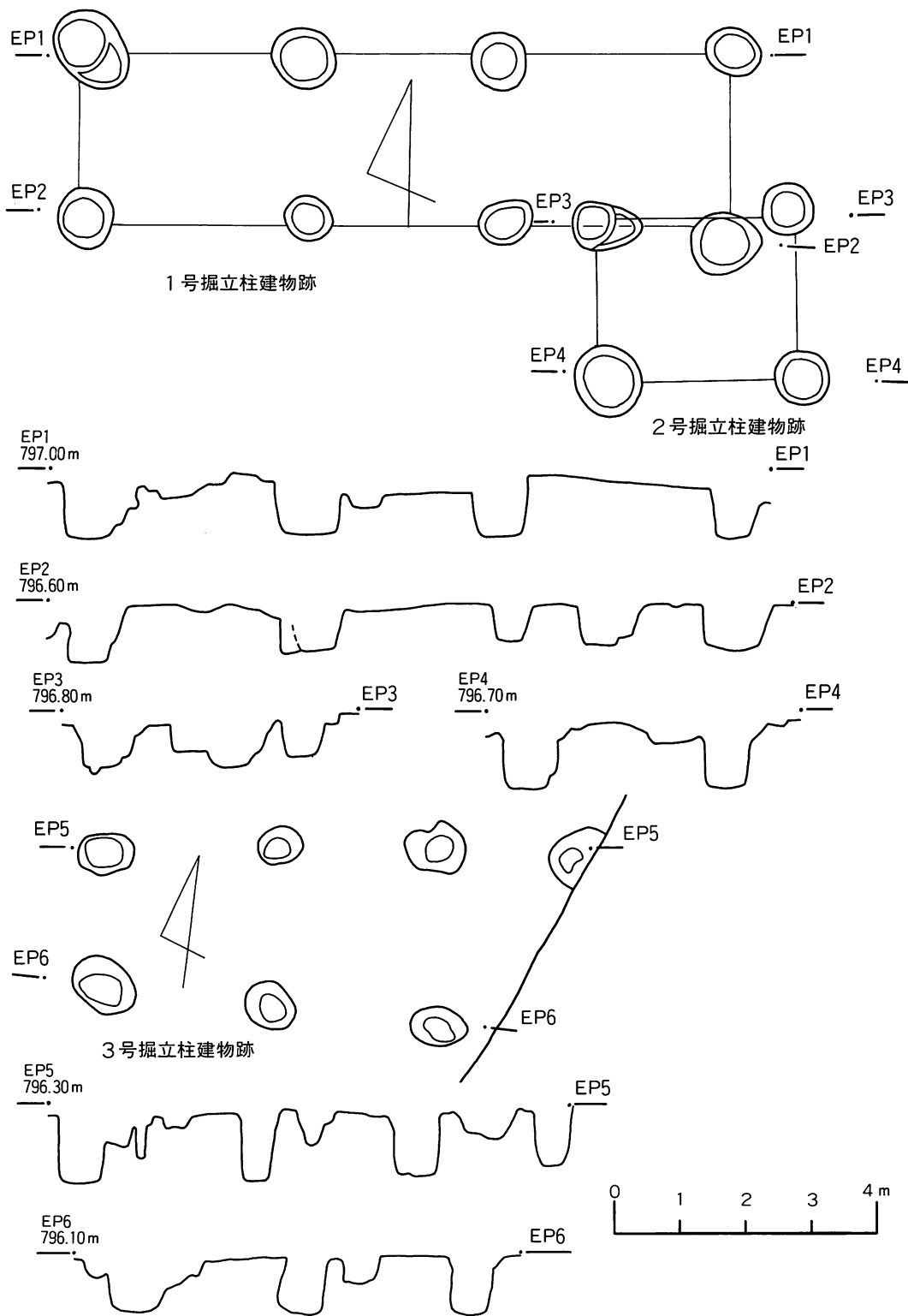
1・2・3・4号掘立柱建物跡の長軸の向きは、集落が構成されている北側の向きと平行に建てられ、5号掘立柱建物跡の長軸の向きは、集落の南側の向きと平行する。また、集落に直交する掘立柱建物跡は、確認されていない。

1号掘立柱建物跡は、曾利Ⅳ式の12号住居址を切って建てられていることから曾利Ⅳ式ないしそれ以降建てられたものと思われる。

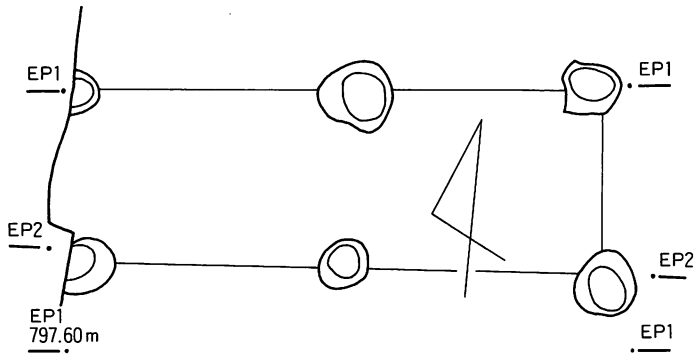
2号掘立柱建物跡は、井戸尻式終末から曾利Ⅰ式の10号住居址を切って建てられている。形態は、調査区内で確認されたところでは2×2本であるが、全体的にみると4×2本の建物跡の可能性が高いと思われる。

4号掘立柱建物跡は、曾利Ⅰ式と思われる20号住居址を切って建てられている。本建物跡も調査区外に延びるものと考えられ、4×2本の柱穴構成をとるものと思われる。

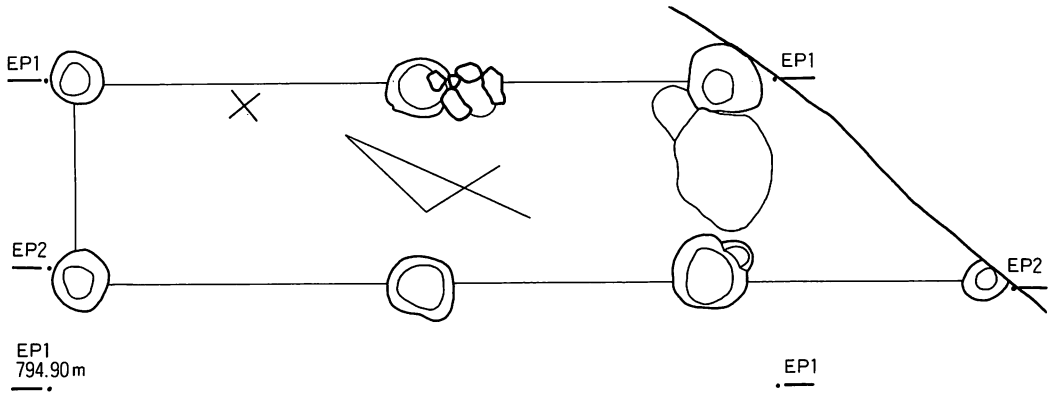
5号掘立柱建物跡は、曾利Ⅲ式と思われる31号住居址の炉石の下に建てられる。また、南の4本目の柱穴については、規模がやや小さく深さも他の柱穴に比べ浅く本建物跡に伴うものであるのか疑問の余地があり、北側へ延びる可能性を含んでいる。（山本）



第 18 图 A区掘立柱建物跡



4号掘立柱建物跡



5号掘立柱建物跡

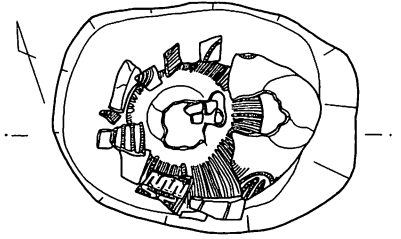


第 19 图 A区掘立柱建物跡

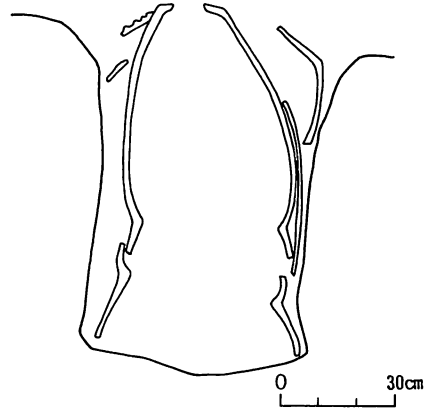
1号埋甕（第20、21図）

二個体が入れ子状に出土し、いずれも逆位で出土した。同時に埋設したものではなく、わずかな時間差をもって再度埋設している。追葬するごとく、まず古い埋甕を掘り出して、新しく埋設する土器を設置し、その後取り出した古い埋甕をもとと同じになるようもとに戻している。意図的に追加埋設しているのである。

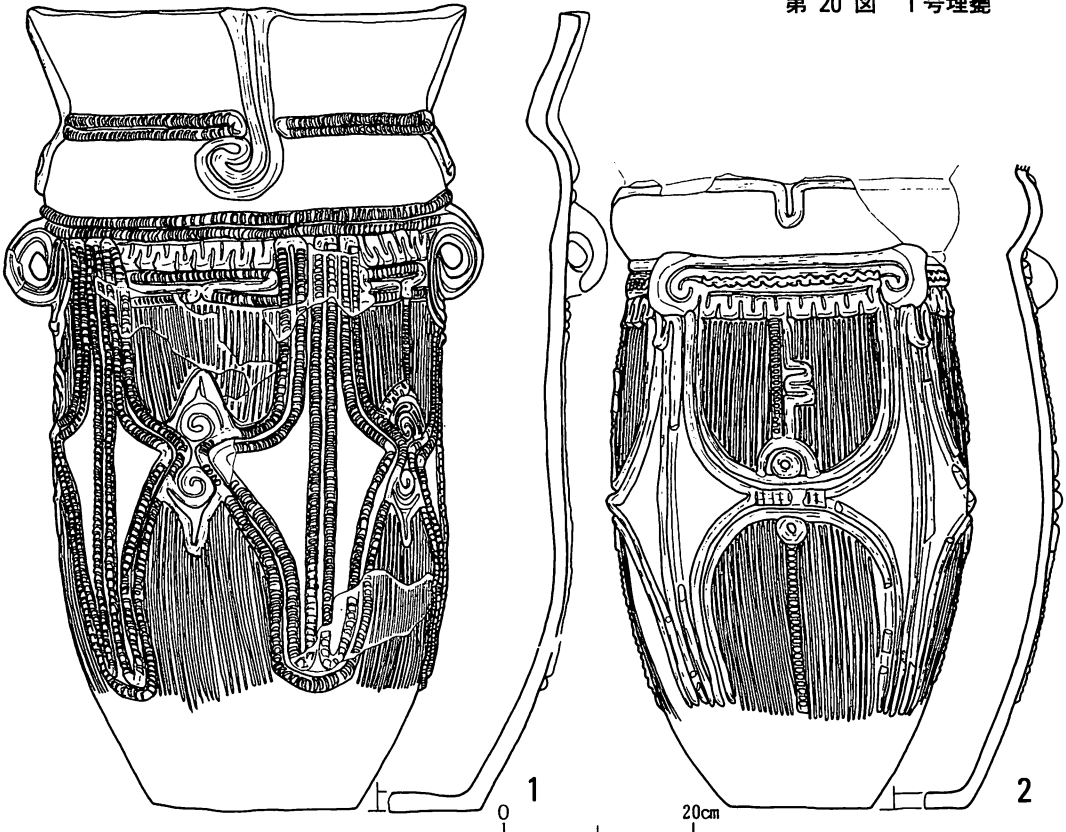
土器はいずれも大形である。1は埋甕を最初に構築したときに埋設されたもので、高さ約80cm、重量は約26kgとなる。2は1を取り除いた後埋設されたもので、高さ約60cm、重量15.5kgをはかる。いずれも同じ文様構成をとるもので、胴部のモチーフはU字形のモチーフを組み合せ、そのなかを半截竹管状工具による平行沈線で充填している。四単位を基本とするが、1の胴部の文様は五単位となり口縁部の構成とずれる。いずれも底部穿孔されている。曾利I式土器の古い段階に位置付けられ、型式的に時間差はみられない。（今福）



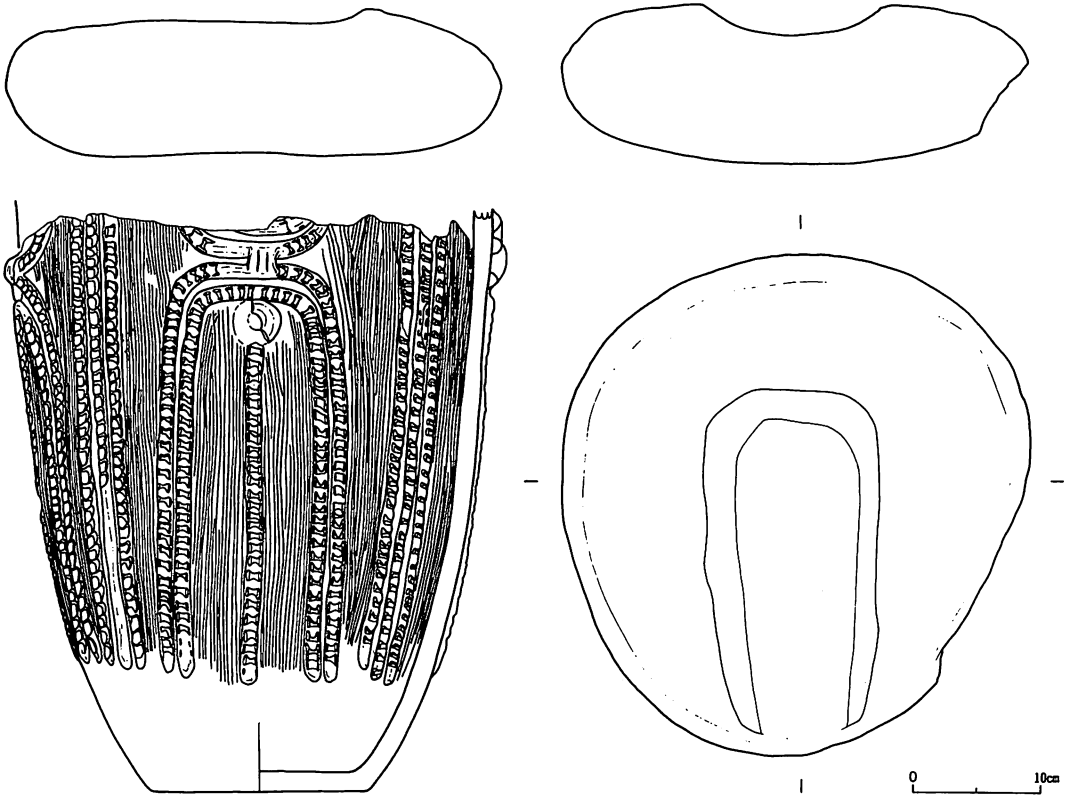
797.8m



第20図 1号埋甕



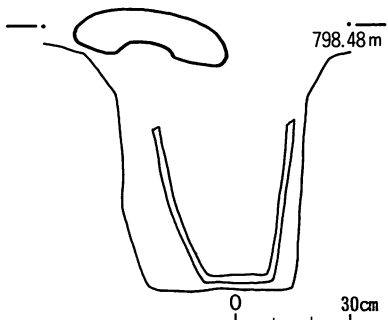
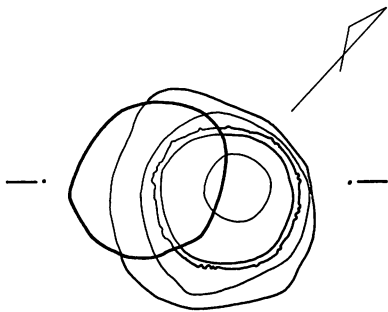
第21図 1号埋甕



第 22 図 2号埋甕出土遺物

### 2号埋甕（第22、23図）

正位に埋設され、石皿が伏せた状態でフタをするようにおかれていた。土器は胴部上半を欠損する。胴部の文様は四単位に区画され、U字形のモチーフを組み合せ、隙間を櫛歯状工具による条線で充填している。底部は穿孔されていない。重量約 11.5 kg で曾利 I 式土器の古い段階に位置付けられる。石皿は輝石安山岩製で偏平な自然石を利用しており、重量は約 25 kg である。（今福）

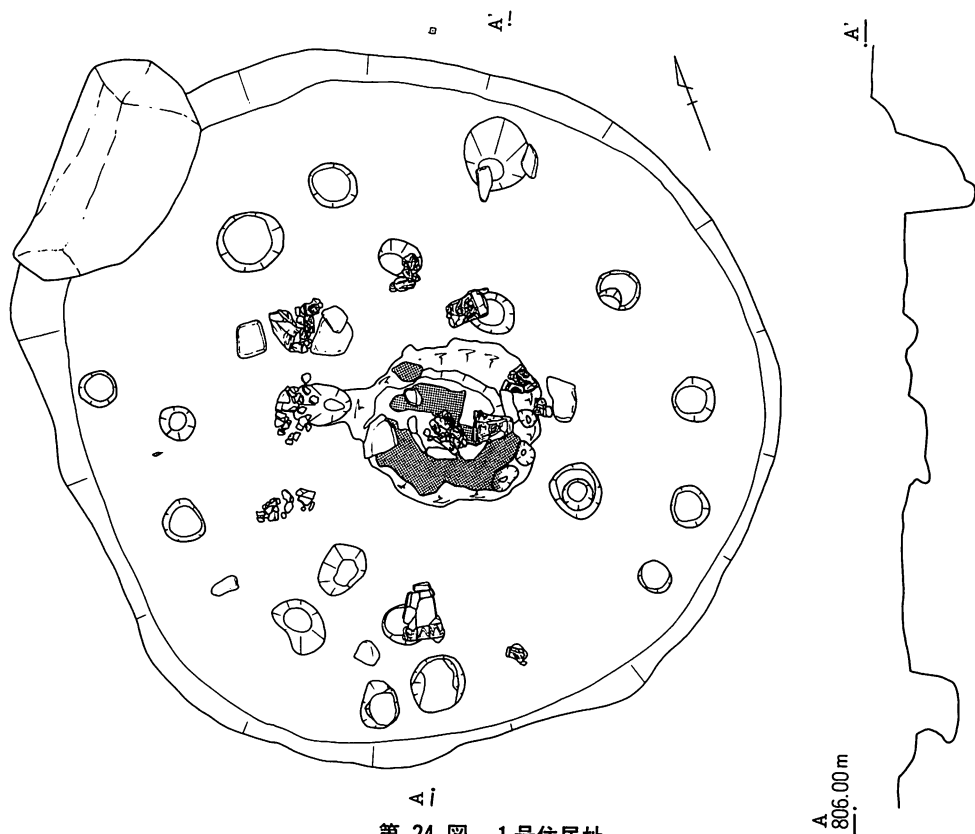


第 23 図 2号埋甕

## 第 2 節 B 区の概要

A 区から北へ連続する部分にあたる。1991年度までに約 2,300 m<sup>2</sup>を調査した（第 4 図）。A 区の北端より約 170 m 北に縄文時代中期中葉の住居址が 2 軒、時期不明住居址が 3 軒みつまっているほか、該期の打製石斧を六本一括して並べた遺構が検出された。またここより北へ約 90 m 離れた場所に平安時代の住居址が発見された。この地区は埋没した小さな河川が多くみられ、遺物遺構は希薄である。（今福）





第 24 図 1号住居址

### 1号住居址（第24、25図）

本住居址は、縄文時代の集落を形成する最北端に位置する。形態は、円形を呈する。規模は、東西方向に長軸を有し、炉を中心とした長軸は5.94 m、短軸は5.50 mを計測する。確認面から床面までの高さは、8 cmから28 cmを有し、壁溝は認められない。

炉は、住居址のほぼ中央に設けられ掘り込みに浅い落ち込みが認められることから、石が置かれていたと考えられる。焼土は厚く形成される。また、本住居址は、内側と外側に柱穴が認められ拡張されたものと思われる。（山本）

遺物 ほとんど覆土中よりまとまったの出土である。1と5はお焦げが内面はおろか断面にまでみられ、これによって破損し、廃棄されたと思われる。いずれも口唇部の把手を欠損しているもののほぼ完形で、重量はそれぞれ、1.92 kg、1.62 kgである。また2、7も底部が抜けている、もしくは欠損しているのみで、ほぼ完形である。それぞれ2.08 kg、4.13 kgを量る。1、2にみられるよう幅広の連続押圧文が隆線に沿い、その脇に波状の沈線もしくは三角押文が施されるものがある。また4のようにパネル文による区画で隙間を残すものがある。さらに土器の外表面は粗雑で製作時の輪積痕が明瞭に残され、指頭圧痕がみられるなど、古い様相をとどめているものが目立つ。底部近くは磨かれている。6は単節縄文を磨り消して文様を表現している。8の土器の胴部は幅広の隆帯二本によっていわゆるサンショウウオ状のモチーフを表現していると思われる。いずれも藤内式土器の古い段階に位置付けられる。（今福）



第 25 图 1 号住居址出土土器

## デポについて（第26、27図）

A・B・C区の調査でデポが確認されたのはB区の1カ所だけであり、その位置はB区1号住居址の北側に存在する。検出された打製石斧6本と土器片は、遺構確認を行うために掘り下げたことによって発見された。打製石斧は2本ずつ対となって置かれ、北側の2本は長辺をほぼ東西に向け、南側に位置する2本は北側の打製石斧に直行する形で置かれ、北側の2本は南側の石斧に対して斜め方向に置かれている。また、重なりあった打製石斧はそれぞれ隙間はない。

打製石斧の上には礫が1点石斧よりやや浮いた状態で認められるが、本遺構に伴うものであるのかどうかは現時点では不明である。しかし、本遺構に伴うものであるとするならば目印的なものと考えられる。本遺構の掘り込み面については、確認されなかったことにより平地に打製石斧を置いたものと思われる。

打製石斧の南端には土器が1片確認され、石斧より低い位置で出土した。この土器片は中期中葉のもので、本遺構もそれと同時期頃と考えられる。（山本）

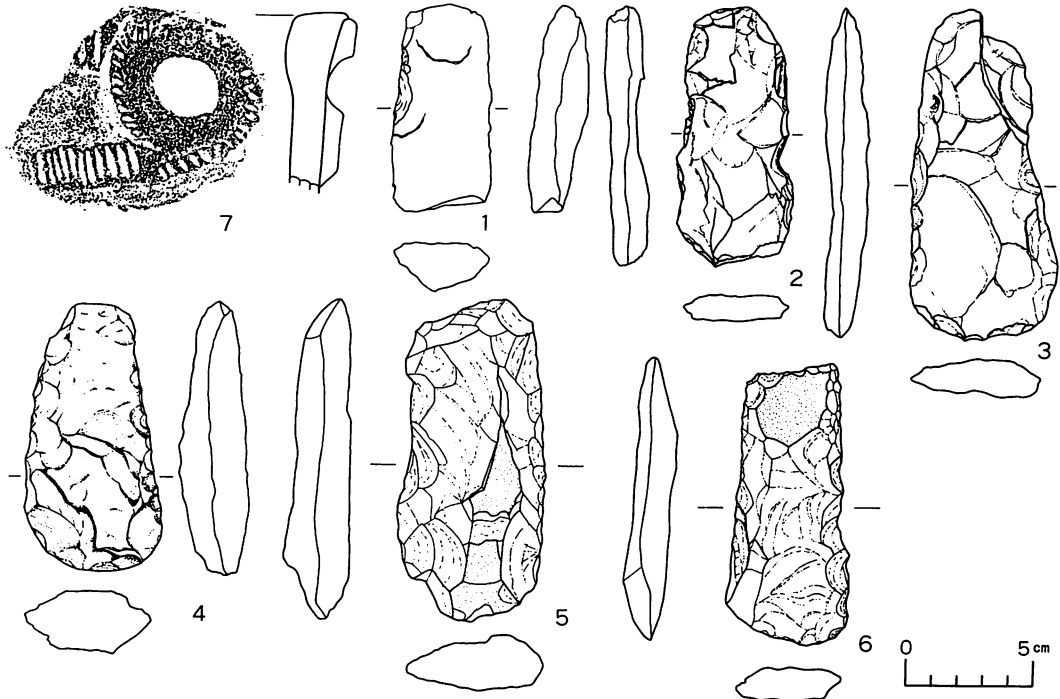
### 遺物

打製石斧6本と土器1片を含む7点の出土である。

1は短冊形打製石斧の欠損品で、刃部を欠いている。現存する長さは8.15cm、基部幅は3.1cmで、重さは70gである。全体に簡単な調整が施されている。

2は短冊形打製石斧で、若干の刻り込みが見られ刃部を1部欠損する。現存の長さは12cm、基部幅は3.8cm、重さは80gである。

3は撥形打製石斧で、現存の長さは13cm、基部幅は3.9cm、刃部幅は5.2cm、刃部の形は円



第 26 図 デポ 土器及び石器

刃である。重さは120gである。

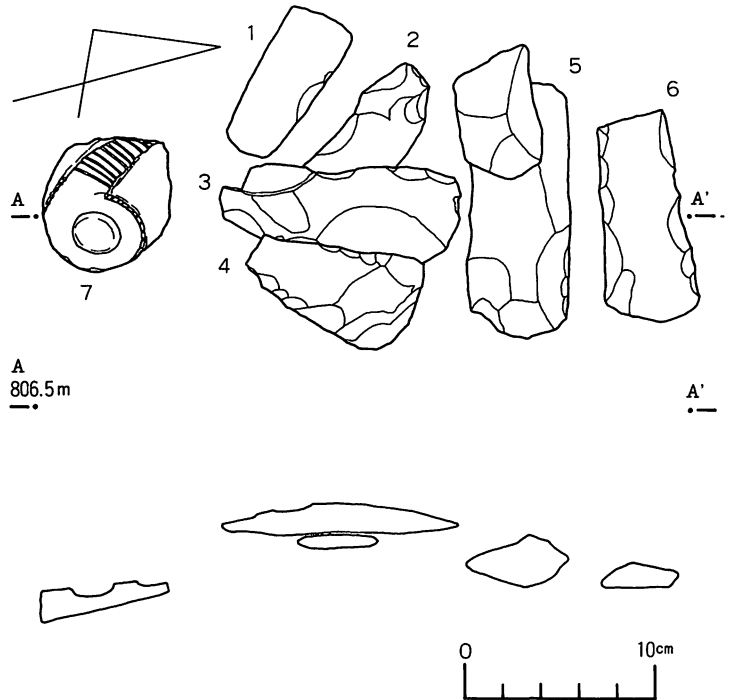
4は撥形打製石斧で、現存の長さは10.5cm、基部幅は3.3cm、刃部幅は5.2cm、刃部の形は円刃である。重さは140gである。

5は短冊形打製石斧で、現存のながさは12.7cm、基部幅は5.2cm、刃部幅は5.3cm、刃部の形は円刃で、重さは200gで6本の中では一番重い。

6は撥形打製石斧で、現存の長さは11.2cm、基部幅は3.9cm、刃部幅は4.8cm、刃部の形は斜刃である。重さは100gである。

7は口縁部を一部残す土器

片である。色調は赤褐色を呈し、口縁部から下に一部煤の付着が認められる。胎土には砂粒を多量に含み、幅広の隆帯には刻み目を入れている。中期中葉の所産である。(山本)



第 27 図 デボ

### 第 3 節 C 区の概要

C区はA区の南側に連続する部分であるが、遺構は特にC区の南側に濃厚である(第5図)。1991年度より調査にはいり、約900㎡を調査した。諸事情によりC区の北端部と南端部と分かれて調査し、中間部分は未調査である。この調査箇所からは、確認のみの住居址をふくめて11軒の住居址がみられる。C区の北の調査区で、五領ヶ台期1軒、井戸尻期1軒、南にあたる調査区で井戸尻期4軒、曾利I期1軒、時期不明2軒、未調査3軒である。土壌は170基以上検出され、猪沢式土器～曾利I式土器が目立っている。しかし表土が浅いため攪乱が多く、明確でない部分が多い。また南端部で東側に隣接する大泉村教育委員会が調査した箇所で諸磯b、c期の住居址が2軒みつかっている。

特に遺構の集中するC区の南側では、明確に住居址の並びは環状を呈さないが、ほぼ南北方向にみられる。また土壌は調査区東側に特に集中してみられる。この調査区のすぐ西側は甲川が形成する崖線となることから、調査区より東側に広がりを持つ集落を想定することができる。住居址は表土が浅いため壁が確認できたものは少ないが、うち1軒は地床炉を持つ2本×3本の掘立柱建物と同じ構造となるものである。C区の北側にあたる調査区において遺構はさほど密にみられず、住居址2軒、土壌約30基ほどが検出された。土壌からは猪沢式土器、井戸尻式土器、曾利I式土器が目立って出土している。(今福)

### 掘立柱建物跡（第28図）

本建物跡は、南北に長軸をもち3×2本の柱穴で構成され、北と南に張り出しの柱穴を有する形態を呈している。

長軸は、東側で5.35 m、西側で5.40 mを計測する。

短軸は、北側で2.42 m、南側で2.54 mである。短軸のそれぞれの中央にやや小規模の柱穴をもつ。

中央の張り出し部では、7.94 mを計測する。

この張り出しをもつ柱穴は、短軸中央に有する柱穴と交差することから棟持柱と考えられる。

床面は、他の遺構との切り合い関係があり、また、凹凸や軟弱であったことから確認はできなかった。

炉は、地床炉を有し、中央やや北側で検出される。このことから本建物跡は住居址としてとらえることも可能である。（山本）

### 20号土壙（第29図）

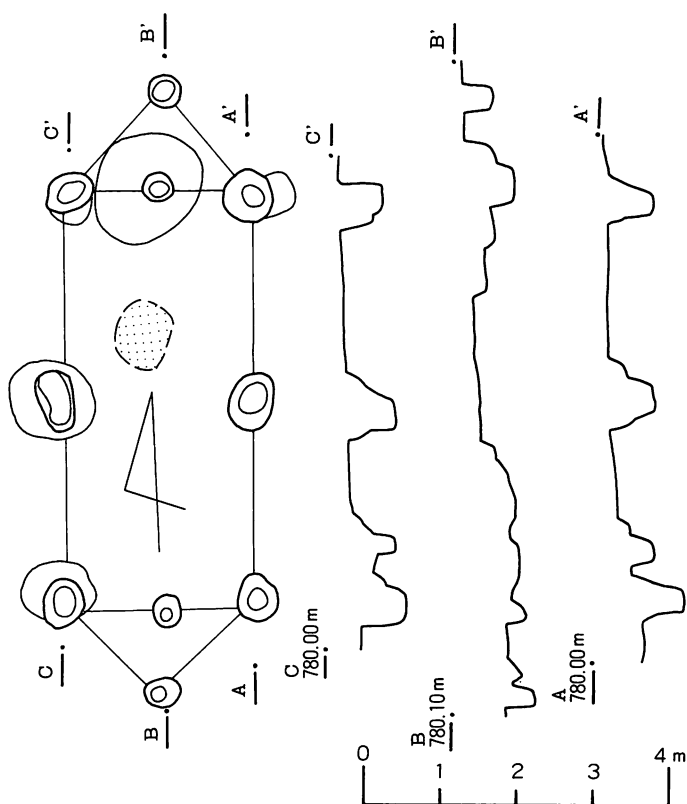
形態は楕円形を呈する。規模は71cm×64cm、深さは13cm、床面は平坦である。立ち上がりは皿状を呈する。遺物は確認面より上で石が認められるものの、土壙が浅いため石はほぼ床直で検出される。（山本）

### 21号土壙A（第30図）

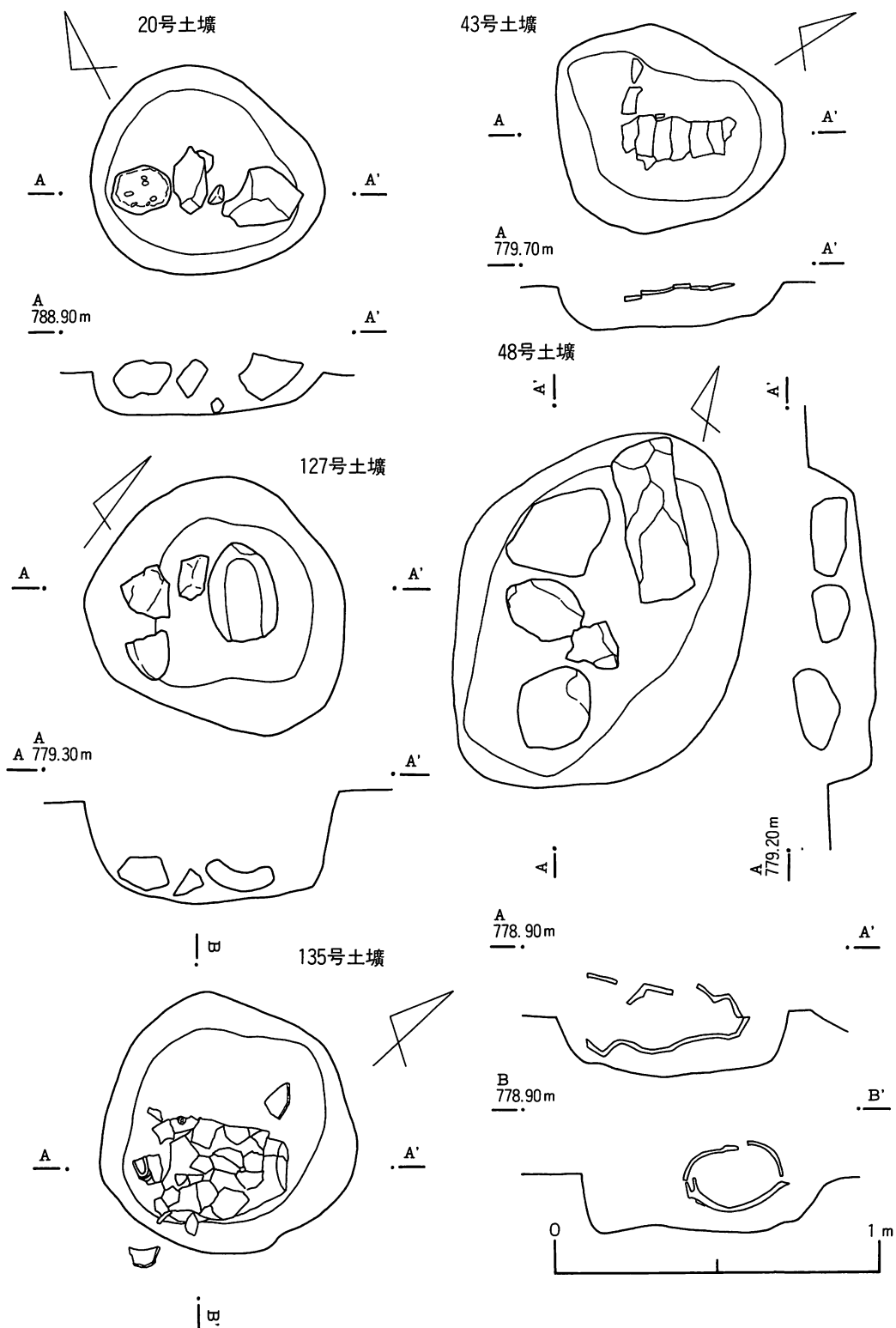
形態は円形を呈する。規模は長径81cm、深さは67cm、床面は平坦である。立ち上がりは、南側壁では袋状を呈する。遺物は確認面下10cmで土器片が出土し、床面から45cm浮いた状態で検出される（底部欠損）。土器・石は、土壙中央部に集中する。**21号土壙B** 形態は楕円形を呈する。規模は短径95cm、深さ75cm、床面は中央部がやや低くなる。立ち上がりはほぼ垂直に近い。遺物は、土器1片および石5ヶ。石はほぼ確認面で認められる。（山本）

### 43号土壙（第29図）

形態はやや楕円形を呈する。規模は75cm×61cm、深さは13cm、床面は皿状を呈する。遺物は土器（土器は土壙中央に置かれている。床面より約10cm浮いた状態で内面を上に向けている。



第28図 掘立柱建物跡



第 29 图 土壤

土器は土壌確認面で検出される。(山本)

#### 48号土壌 (第29図)

形態は楕円形を呈する。規模120cm×93cm、深さ17cm、床面はほぼ平坦で、立ち上がりは垂直に近い。遺物は石(石は床面からやや浮いた状態を呈するものもあり、全体的に石は確認面より頭を出している)。(山本)

#### 127号土壌 (第29図)

形態は不整円形を呈する。規模80cm×77cm、深さ32cm、床面は平坦、立ち上がりは垂直に近い。遺物は石(完形の石皿及び礫)。石皿の出土は、ほぼ床面直上からのものであり、また、礫についても同様の状態である。

#### 135号土壌 (第29図)

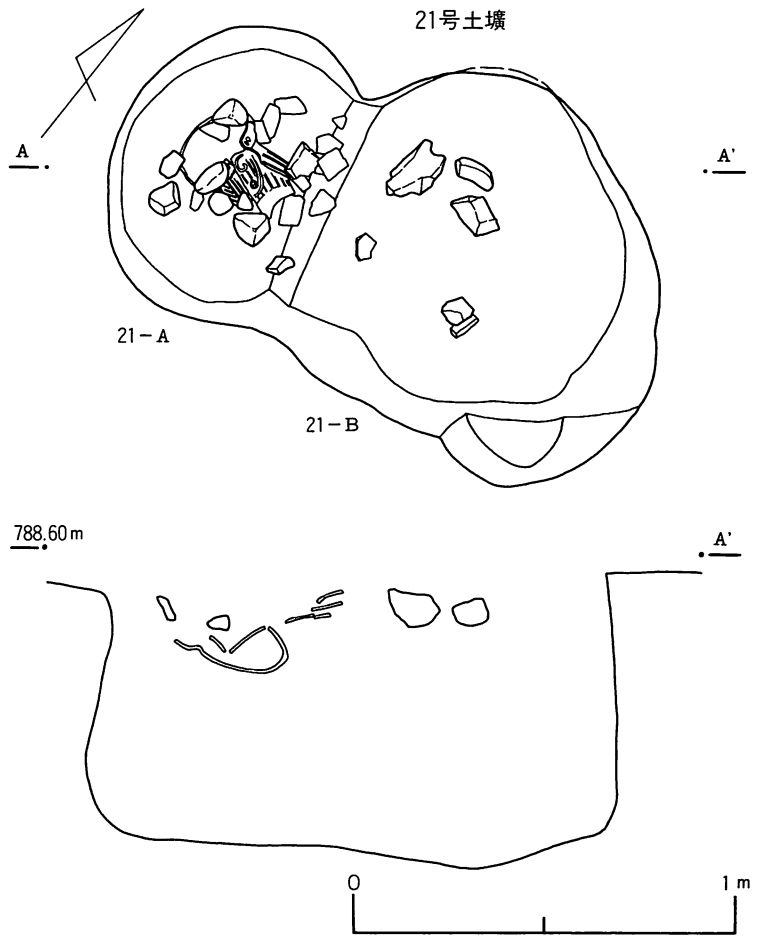
形態は円形を呈する。

規模は82cm×78cm、深さ18cm、床面はやや平坦で皿状を呈する。遺物は土器(確認面より半分上に出ている状態で出土、土壌東側に土器がよっている)。C区では遺構確認面まで非常に浅く、耕作地であったために遺構の上面は攪乱が著しく、土器や石(礫)が確認面より上で検出されることが多かった。(山本)

土壌の数は170基確認され、覆土中の遺物(土器・石)の有無から4つに分類することが可能である。

- 1類 覆土中からなにも発見できなかったもの
- 2類 覆土中に石(礫)を含むもの
- 3類 覆土中に土器と石(礫)を含むもの
- 4類 覆土中に土器を含むもの

である。このうち、石(礫)を含んでいる2・3類では礫に混ざって石皿が検出される土壌が存在しており、石皿は、完形品のもの及び破片のものが土壌内に認められる。(山本)



第30図 土壌

# 第 3 章 考 察

## 第 1 節 甲ッ原遺跡の集落構造

甲ッ原遺跡では、少なくとも 3 箇所以上の集落のまとまりがみられる。A 区においては明確に環状集落となり、C 区では調査面積が少ないものの南側部分で環状集落を呈するものと推定できる。B 区は単期の集落で、実態はあまり明確でない。

A 区ではおよそ 150 m 程の環状集落と推定できる。この集落では堅穴住居址が最も外側に配列し、中央の広場に土壌が特に集中してみられ、住居址群と土壌群の間に掘立柱建物が巡る、といった構造となる。しかし通時的にみていくと掘立柱建物が存在している時期に住居はほとんどみられず、住居址と掘立柱建物跡の位置関係は環状に並ぶという点を除いて、一緒に考えるべきものではない。時期的にみていくと前期初頭に 1 軒のみ単独でみられ、その後諸磯 b 期に一時的に集落となり、少なくとも 2 段階の変遷をたどる。その後五領ヶ台期に 1 軒住居がみられるもののしばらくの空白期となり、井戸尻期に再び集落が出現する。以後継続しながら曾利Ⅲ期でピークを迎える。次の曾利Ⅳ期からは掘立柱建物が出現するものの縮少の一途をたどり、曾利Ⅴ期で終焉の時となる。

一方 C 区では、集落の構造ははっきりしない部分が多い。南側の遺構が集中する箇所では、猪沢期から土壌が多くみられるようになり、井戸尻期に集落が構成されるが、曾利Ⅰ期で終焉を迎える。また隣接する大泉村教育委員会が調査した部分では諸磯 b、c 期の住居址がわずかながらみられる。またこの場所から A 区の集落の中間にあたる C 区北側の調査区に、五領ヶ台期と井戸尻期の住居が存在する。C 区の北側と南側の間にあたる未調査区域では諸磯 c 式土器から井戸尻式土器にかけての土器片が表面採集でき、該期の集落の存在を窺うことができる。

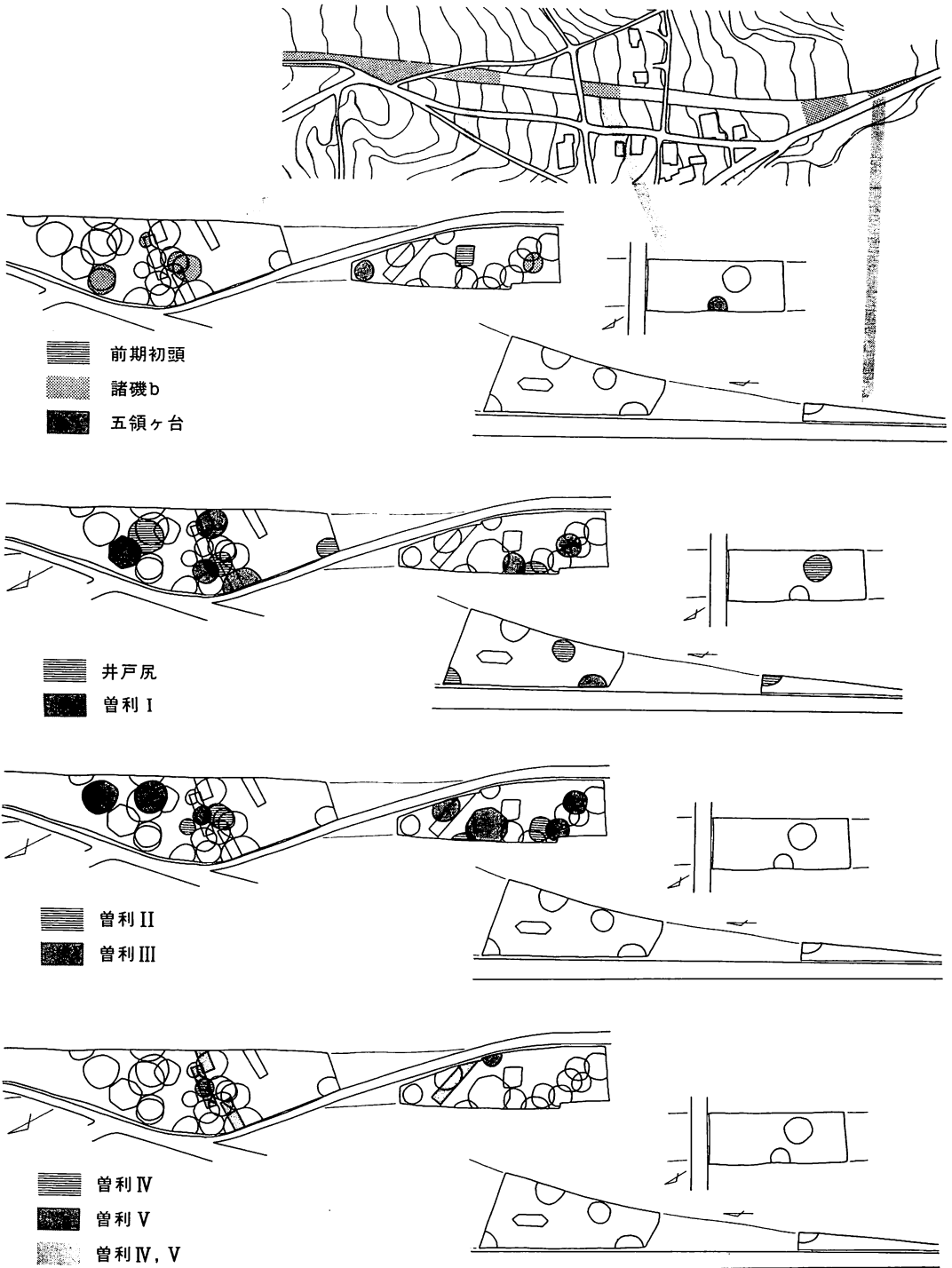
B 区では A 区の集落より北へ約 170 m のところに藤内期の小規模な集落がみられる。A 区の集落との間には該期はおろか縄文時代の遺構遺物はほとんどみられず、集落として空間的に連続するものではない。

遺跡全体を概観すると、一部時間的に重複しているとしても A、B、C 区の集落にはズレがみられ、通時的に居住の場所をかえていると考えられる。整理してみると、前期では A 区に初頭の住居が 1 軒みられるが、諸磯 b 期には A、C 区に集落が形成される。A 区では二段階ほどで終るが C 区で諸磯 c 期まで集落が続く。中期にはいると A、C 区で五領ヶ台期の住居が散漫ながらみられ、B 区で藤内期の集落が形成されるが、いずれも継続しない。安定して継続するのは井戸尻期からで、A、C 区とも再び住居が増え始める。C 区では継続せず、曾利Ⅰ期で終わってしまうが、A 区では発展し、曾利Ⅲ期で最大となり、以後斜陽化しながら曾利Ⅴ期で終焉を迎える。

総じていえば諸磯 b 期で一回安定し、以後散漫な時期をへて、井戸尻期で再び集落が形成しはじめ曾利期に入って A 区で展開していく、といえる。遺物のみをみれば諸磯 b 式土器から曾利Ⅴ式土器まで絶え間なく続くが、集落の形成や継続性は大きく偏りがあり、集団の安定、発



展、分化、衰退、吸収を狭い範囲で繰り返していることが推察される。集落の継続性や土器型式の編年的問題、集団の移動など多く吟味しなければならない部分があり、単純に結論付けることは困難であるが、今後の調査によって明らかにしていきたい。(今福)



第 31 図 A・C区集落変遷図

## 第2節 掘立柱建物跡

名称については、発見された当初長方形を呈していたことから長方形柱穴列と名を記していたが、類例を調べている間に様々な形態が存在していることが判明し、本遺跡では掘立柱建物跡の名称を使用することにした。また、混乱を避けるために、他の遺跡で付けられている名称を総て掘立柱建物跡と記すことにした。

1989年から1991年までの3年間で発見された棟数は6棟で、その内訳はA区では5棟、C区では1棟であり1991年の調査で初めて炉を有する掘立柱建物跡が検出された。A区で掘立柱建物跡が確認されたのは、環状集落を構成する住居址群と土壌群のほぼ中間に位置し、住居址群が形成される方向に長軸を向けて建てられている。また、放射状に広がりをもつ建物跡は、現段階では確認されていない。

掘立柱建物跡の形態は、A区では4×2本を主体とする長方形であり、C区では3×2本で短軸のほぼ中央に棟持柱と思われる張り出しの柱穴が認められ、亀甲形を呈している。

長野県下で4×2本の柱穴をもつ建物跡は現段階では不明であり、梨久保遺跡のE地点東区で1棟発見されているが、時期は平安時代～中世とされている。しかし、その時期については多少の疑問も感じられ、縄文時代中期後葉ないしそれよりもや新しい時期の可能性を含んでいる。床面積は約33㎡を有している。新潟県下では城之腰遺跡で2棟の存在が知られる。この両県では、C区で見られた亀甲形で短軸の中央に柱をもち、そして張り出しのある柱穴を有する形態は認められていない。

それぞれの掘立柱建物跡の床面積は、A区の1号では28.0㎡、2号は15.1㎡、3号は15.1㎡、4号は17.1㎡、5号は31.9㎡を有し、C区の掘立柱建物跡の床面積は13.3㎡である。

住居址の床面積を列記すると次のようになる。10号住居址の床面積は34.5㎡、33号住居址は65.0㎡、34号住居址は17.8㎡である。27号住居址は24.62㎡、28号住居址は23.32㎡、35号住居址は21.1㎡、36号住居址は24.62㎡、39号住居址は18.58㎡、C区1号住居址の面積は25.68㎡をそれぞれ計測する。

岐阜県関市の塚原遺跡で検出されている掘立柱建物跡は、環状をなしており4×2本が8棟検出され、時期は中期後半である。建物跡の最小の床面積は3×2本のもので6.9㎡を有し、10～19.99㎡までは8棟、20～29.99㎡のものは8棟、30㎡以上は1棟で4×2本の33.3㎡を有している。

また、長野県棚畑遺跡では2×2本が主体であり、本遺跡に見られる4×2本の存在は認められていない。そして3×2本は3棟確認され、床面積は13.3㎡・23.7㎡・23.72㎡を有し、C区で見られる形態に似かより、面積については同じ広さのものも存在している。同県の松本市南中島遺跡でも3×2本の掘立柱建物跡が1棟検出され、床面積は34.2㎡を有する。

神奈川県三の丸遺跡では、4×2本の建物跡は数棟数えるのみである。

床面積から住居址と掘立柱建物跡とを比較すると、建物跡は住居址と同程度の広さをもち、中には1号・5号のように住居址より広いものも存在している。短軸は、1号から5号まで2

～3mの範囲で構築され、C区の建物跡についても同様のことがいえる。このことから掘立柱建物跡の面積は、長軸の長さ按比例して広がりを持ち、また短軸は一定の範囲内で構築を行っていることがわかる。

C区の建物跡は今回の調査では初めての形態であり、また、炉の存在が確認され建物跡は住居址としてとらえることも可能である。構築時期については未整理のため不明である。炉を有する建物跡は神奈川県下でも知られるところであり、三の丸遺跡では炉は地床炉をもち、C区の建物跡の炉と形態を同じにする。しかし、本遺跡の縄文時代中期後半の住居址の炉の形態は、礫を使用した石囲炉であるのに対して、建物跡の炉は地床炉である点に疑問を感ずる。

次に、環状にめぐる掘立柱建物跡の向きについて、清水上遺跡では時期的に本遺跡より古いものであるが、中央広場を中心として長軸を放射状に広げるものが16棟（長方形住居跡）が存在し、焼土を有しているものがかなり多い。そして、栃木県根古谷台遺跡も長方形大型建物跡が放射状に広がっている。しかし、放射状に広がる掘立柱建物跡の存在は、多数の掘立柱建物跡を検出した神隠丸山遺跡では認められず、また、居平遺跡でも認められていない。このように見ていくと、放射状に構築したものと、長軸を円周上に向けたものが存在しており、なぜ一方向だけの構成を取らないのかその理由は明らかではないが、用途の違いによるものか、地域的なものによるのかはこれからの研究課題となろう。

掘立柱建物跡については、掘立柱建物跡と住居址の形態及び集落内における掘立柱建物跡と住居址の形成されている位置の相違により、従来から高床式住居址、平地式住居址、共同作業場、倉庫と様々な説があるが、A区については、現段階でははっきりとしたことはいえない。また、C区については、住居址の可能性を含んでいるということに止めておきたい。

未整理の部分が多く、まとまりのない考察と成ってしまったが、これからの整理で疑問に思っていることを明らかにしていきたい。（山本）

#### 引用・参考文献

- 石井 寛 1989年「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究収録』第6冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団  
茅野市教育委員会文化財調査室 1991年 『阿久尻集落の方形柱穴列をめぐって 研究資料』  
新潟県教育委員会 1991年 『城之腰遺跡』  
関市教育委員会 1989年 『塚原遺跡・塚原古墳群』  
茅野市教育委員会 1990年 『棚畑遺跡』  
松本市教育委員会 1991年 『松本市南中島遺跡』  
横浜市埋蔵文化財センター 1990年 『全遺跡調査概要』  
新潟県教育委員会 1990年 『清水上遺跡』  
茅野市教育委員会 1986年 『高風呂遺跡』  
岡谷市教育委員会 1986年 『梨久保遺跡』  
駒形敏朗・小熊博史 1990年 「藤橋遺跡における掘立柱建物跡の調査」『長岡市立科学博物館研究報告』  
第25号 長岡市立科学博物館  
関口達彦・加納 実・福田依子 1989年 「縄文時代の掘立柱建物跡 一市原市武士遺跡の成果から一」  
『研究連絡誌』第25号 財団法人 千葉県文化財センター

### 第3節 甲ッ原遺跡の出土土器

前期初頭の土器 該期の土器は34号住居址でまともってみられるのみで、全体でおよそ300点ほどである。薄手で器面に指頭圧痕の顕著な東海系の土器と繊維を含む在地土器が混在して出土している。東海系の土器は木島式土器とよばれるもので、全体の約3割程を占める。口縁部と頸部の段の刻みの方法により、A—篋状工具によって横位に連続押圧するもの（第12図1、2）、B—多截竹管状工具によるもの（同図3～6）、C—指によってつまみだしているもの（同図7）のおよそ3つに分類できる。Aは口唇部と垂下粘土紐に工具による連続押圧の刻みがみられる。口縁部は半截竹管状工具によって縦位の細線が施文され、胴部は横位の細線に部分的に縦位の細線が施されるものとなる。この胴部文様は菊名貝塚に類例がみられる。第12図1、2、9は同一個体の可能性がある。Bは口縁部と頸部の段の境もしくはその直上に多截竹管状工具によって連続押圧し、口縁部、胴部とも斜位あるは矢羽状の細線が施され、口唇部には刻みがみられない。細線は全体にやや雑な感を受ける。Bは主体的にみられる一群である。このほか胴部破片が多数みられるがほとんど斜位あるいは斜格子の細線となるもので、おそらくBの胴部であろう。Cはわずか細片が1点あるのみである。

以上は木島遺跡の第Ⅱ群14類土器（渋谷1981）、あるいは清水ノ上貝塚第二群第1類B（山下1976）に類似するもので、時間的に木島Ⅷ式、もしくは清水ノ上Ⅰ式に相当する。しかし、土器の特徴において細部で異なる部分がみられる。木島式土器は段の部分の刻みの多くが指によるつまみ出しによるもので、篋状工具による刻みは少ない。こういった工具による刻みは、木島Ⅸ式段階から多くみられるとされる（渋谷1982）が、垂下粘土紐のあり方や、頸部の段において木島Ⅸ式とは異なるものである。また清水ノ上Ⅰ式とされる一群と比較すると、細線のみられない第二群1類C・Dは、甲ッ原遺跡で確認されず、口唇部直下に刺突のめぐる1類Aのみみられない。さらに1類Bに類似するものの甲ッ原遺跡では胴部に細線が施されるものがほとんどである。しかし清水ノ上貝塚では胴部が無文となるものが圧倒的と報告され、これらを清水ノ上Ⅰ式とはいいがたい。

その他、この段階の連続的な変遷については増子康真や池谷信之の研究がある（増子1982、池谷1985）。増子は木島式土器をA～Dの四段階に分けて考えており、甲ッ原遺跡の土器は木島D式に近い内容となる。しかし、口縁端部に連続刺突はみられず、また胴部には細線がみられ、やや異なるものである。池谷は上の山Z式段階以降を木島式土器とし、Ⅰ～Ⅲの3段階に分けている。この中でⅡ段階のB類2とする一群に甲ッ原遺跡の土器は比定できる。B類1との違いは、段となる部分が、口縁部の屈曲部か、頸部かの違いだが、細部では段の刻みの方法や、竹管状工具による連続刺突、細線の方向の乱れなどが指摘され、後続するC、D類とは口縁端部の連続刺突や、胴部の細線の有無に違いがあるとされる。また池谷はB類1と2では時間差があるのかは明確にしていないが、甲ッ原遺跡の例ではB類1は含まれず、型式的特徴はB類1とC類の、さらに渋谷の木島Ⅷ式とⅨ式、増子の木島C式とD式の中間的様相を示しており、時間的に差があるものと考えられる。

出土例をみてもと池谷のいうB類1は静岡県木島遺跡、山梨県塩川遺跡、埼玉県北宿遺跡、神奈川県菊名貝塚などでみられ、B類2は静岡県清水柳北遺跡20号住居址、千葉県幸田貝塚で出土している。今後、資料の増加によって慎重に検討しなければならないが、さらに細分される可能性は指摘できよう。在地の繊維を含む土器については紙面の都合上別の機会に譲りたい。

**中期中葉の土器** まとまった資料としてはB区1号住居址で、藤内期が、またA区10号住居址で井戸尻期から曾利I期の土器がみられる。この他、土壙や単独埋甕に井戸尻期や曾利I期の資料が比較的多くみられる。

B区1号住居址の藤内期の土器群は、輪積痕を残し、指頭圧痕がみられ、また隆線に沿う連続押圧文のわきに三角押文が施されるなど、古い様相を残している。またパネル文も空間を密に埋めるものではなく隙間を残すものがあり、全体的に新道期の特徴がみられ、藤内式土器でも古い段階に相当する。

この他、甲ヶ原遺跡では井戸尻期から曾利期にかけての土器が多くみられ、まとまった資料となり得る。かつて、該期の資料は山梨県内では非常に少なかったが、近年増加しつつある。10号住居址の例では、四単位の把手を持ち、器形の屈折するもの(第7図2)や、屈折底となるもの(第8図10)など井戸尻式に特徴的な個体が見られる。第7図2の土器の文様はU字形の隆線に渦巻と三叉文によって表現され、第8図7の胴部上半のモチーフに類似する。7もまた井戸尻式土器で、同図11、14や埋甕の曾利式土器(第21図、第22図)のに先行するものである。このU字形のモチーフを組み合わせた文様を持つ一群は井戸尻期終末から曾利I期の最初にかけてみられる。井戸尻期のものは10号住居址にみられるよう、隆線上の刻みが棒状工具あるいは篋状工具によって刻まれ、埋甕の土器のよう曾利期では半截竹管状工具の内面を使って連続押圧していく手法となっている。基本的に口縁部は無文であるが、井戸尻期に口縁部下の横位にめぐる波状隆線はみられない。また胴部文様の下端部が古いものとはじる傾向にある。10号住居址の11の土器は全面横位の文様構成となり、曾利I期にみられる一群であるが、半截竹管状工具の外表面による沈線で内部に連続刺突や交互刺突がみられ、古く位置付けることができる。さらに156号土壙の水煙把手を持つ土器の胴部に縦位の条線のなか横位の条線がみられる。この手法は長野県に分布する唐草文土器の手法と共通するものである。(今福)

#### 引用・参考文献

- |       |       |  |
|-------|-------|--|
| 池谷信之  | 1985年 | 『平沼吹上遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会                |
| 小野正文  | 1987年 | 「井戸尻式土器」「曾利式土器」『釈迦堂』II 山梨県教育委員会        |
| 桑山龍進  | 1980年 | 『菊名貝塚の研究』                              |
| 小池孝他  | 1990年 | 『中越遺跡発掘調査報告書』宮田村教育委員会                  |
| 渋谷昌彦他 | 1981年 | 『木島』富士川町教育委員会                          |
| 渋谷昌彦  | 1982年 | 「木島式土器の研究—木島式土器の型式細分について—」『静岡県考古学研究』11 |
| 末木 健  | 1988年 | 「曾利式土器様式」『縄文土器大観』3                     |
| 増子康真  | 1982年 | 「木島式の検討」『中部高地の考古学』II                   |
| 森原明廣他 | 1992年 | 『塩川遺跡』山梨県教育委員会                         |
| 山下勝年他 | 1976年 | 『清水ノ上貝塚』                               |
| 米田明訓  | 1986年 | 「中期後半の土器の諸問題」『柳坪遺跡』山梨県教育委員会            |

## 第4節 土壌について

A区では200基以上、B区では10基前後、C区では170基以上の土壌が検出されている。整理の都合上土壌の総てを載せる事はできなかった。そこで、今回整理できたものについて述べていきたい。

まず、土壌の大半は覆土に石を伴い、小礫を含むものから人頭大或はそれを越す大型の石が土壌中に存在していた。これらの石は、甲川と油川の両河川に挟まれた本遺跡では、石の採集は容易であり、周辺の石で利用されたものと考えられる。

しかし、これらの礫に混ざって、石皿が完形品或は破片となって検出されている例があり、石皿を出土している土壌の数については、整理されたもので5基が現在知られている。

土壌総数から比較した場合、石皿が出土したものは5基と数量的には少ないものの、破片で出土している石皿片の形から、意識的に割って土壌内に入れられたことが考えられ、石皿を有する土壌の数はさらに増えるものと思われる。そして、意識的に割ったと思われる石皿の破片をもつ土壌と、別の土壌で出土した石皿片との接合関係はまだ行ってはいないが、これを行うことによって同時期の土壌の存在と、土壌からの出土した石皿の意味がでてくると思われる。また、住居址内から出土した石皿片との接合関係も考慮していかなくてはならないであろう。

鈴木保彦氏は、遺構から石皿が出土している例を集成し、各種の埋葬施設から出土している例、屋外埋甕（埋設土器）にともなう例、祭祀施設から検出される例をあげている。

埋葬施設からの出土で、「墓壇内から出土するものは副葬品としての意味合いが強く縄文人の石皿に対する独特の意識を感じず」と述べている。本遺跡の土壌から出土している石皿を、この分類にあてはめていくと、接合関係を行うことで石皿の本来の機能から埋葬のための機能へと移行した過程が理解されるのではなかろうか。

屋外埋葬（埋設土器）にともなうものについては、本遺跡でも確認されており、口縁部を欠損した埋甕の上にあたかも蓋をした様な状態で、皿の部分を下に向けて発見されている。石皿は完形品である。また、祭祀施設にかかわる遺構から出土したものは、本遺跡からは発見されていない。

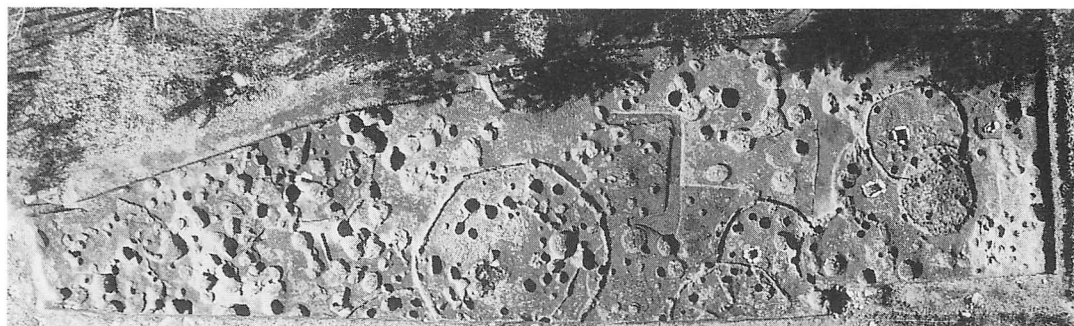
このように見ていくと、甲原遺跡の石皿の出土例は埋葬にかかわるものが含まれているといえよう。埋甕の欠損状態と土壌から出土している石皿の欠損状態を同一の意味合でとらえることができるかどうか疑問はあるが、欠損させた石皿を土壌に入れたものと欠損させた埋甕との共通点をあえてあげるならば、どちらも欠損させているということである。これは欠損させるという行為に、何らかの意味をもたせているためであろうと考えられるが、現時点では整理半ばであり、これからの調査によってさらにその数は増加することが予想され、その時に再度検討して行きたい。（山本）

### 引用・参考文献

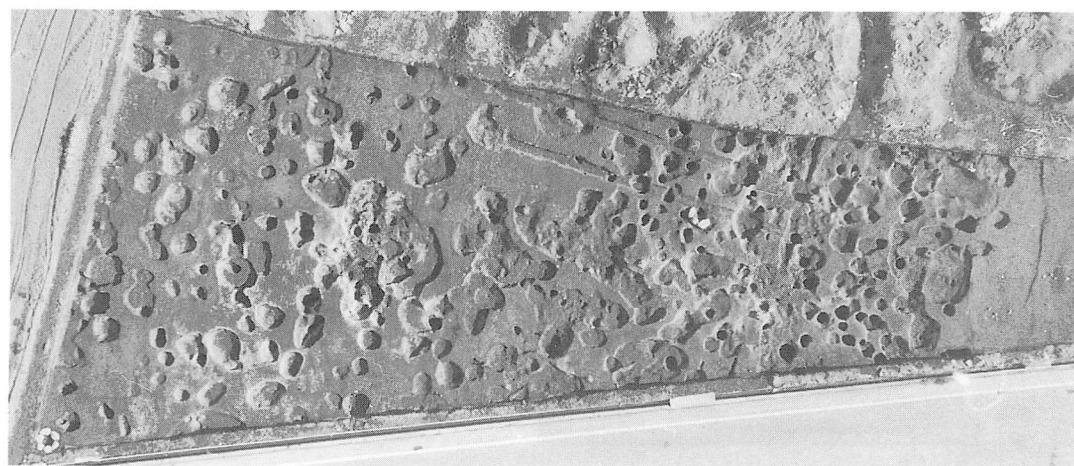
鈴木保彦 1991年 「第二の道具としての石皿」『縄文時代 2』縄文時代文化研究会



遺跡全景



A区(南半)全景



C区(南半)全景



A区(北)近景



C区(北)全景



B区近景

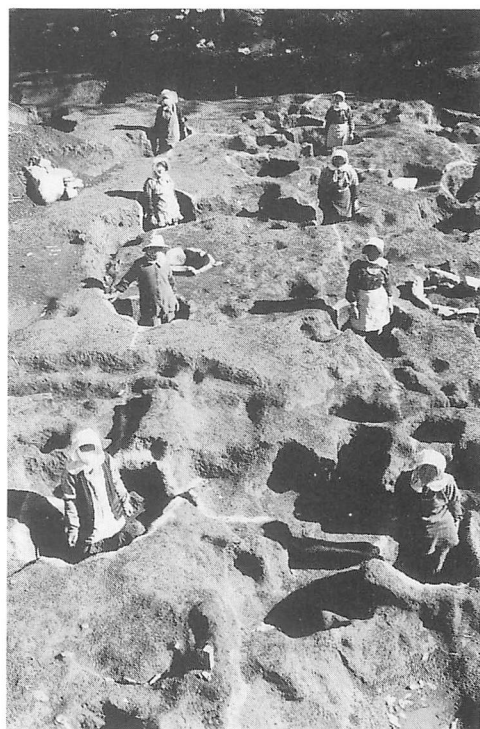




A区 33号住居址



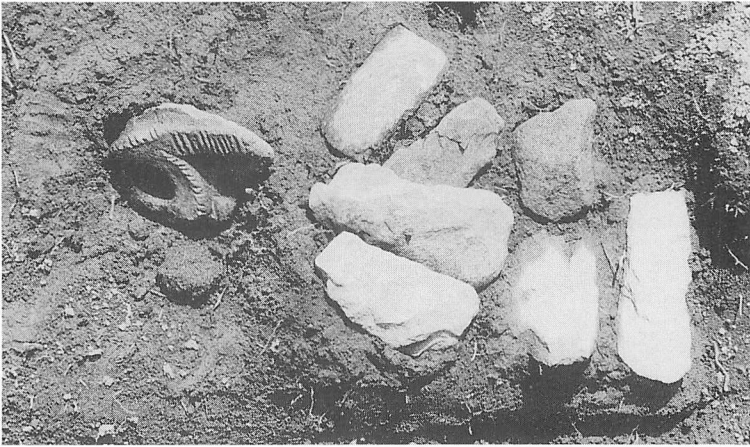
A区 7号土坑



A区 1号掘立柱建物跡



B区1号住居址



B区テボ



C区掘立柱建物跡



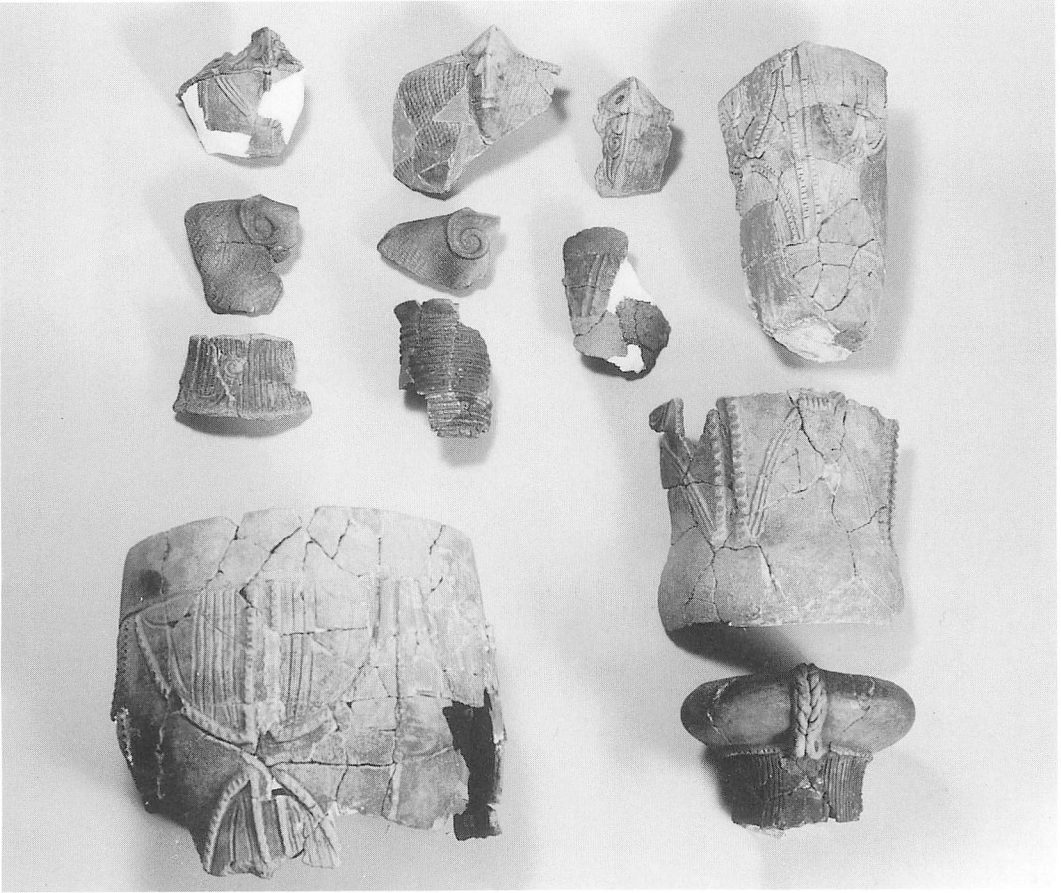
C区127号土壌



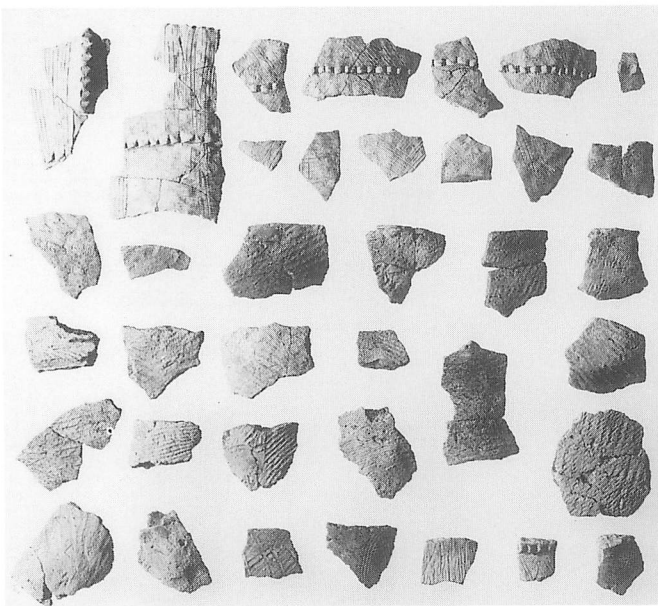
A区 埋甕・土壙出土土器



B区 1号住居址出土土器



A区 10号住居址出土土器



A区 34号住居址出土土器



A区 1号埋葬

## 報告書コンピュータ入力用フォーマット

フリガナ	カブツッパライセキ		
書名	甲ッ原遺跡概報Ⅰ		
副題	第1次調査～第3次調査		
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第71集		
著者名	山本茂樹・今福利恵		
発行者	山梨県教育委員会		
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下曾根 923 〒400-15 0552-66-3016		
印刷所	(有)新屋堂印刷		
印刷日・発行日	平成4年3月25日・平成4年3月31日		
フリガナ カブツッパ 甲ッ原遺跡	所在地	山梨県北巨摩郡大泉村西井出	
	25000分の1地図名・位置	谷戸	北緯 135°51' 東経 138°24'
概要	主な時代	縄文時代前期・中期、平安時代	
	主な遺構	住居址(縄文時代前期初頭1軒・諸磯b6軒・中期五領ヶ台2軒・藤内2軒・井戸尻8軒・菅利19軒・時期不明11軒・掘立柱建物跡6軒・平安時代2軒)他土坑・溝	
	主な遺物	縄文時代前期・中期の土器・石器(打製石斧・石鏃・石匙・石錐・石皿・磨石)土偶 平安時代土師器	
	特殊遺構	デポ	
	特殊遺物		
調査期間	1989年度～1991年度		

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第71集

### 甲ッ原遺跡 概報Ⅰ

印刷 平成4年3月25日

発行 平成4年3月31日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県東八代郡中道町下曾根 923

TEL 0552-66-3016

発行 山梨県教育委員会

印刷 (有)新屋堂印刷

